WASON
HQ
1104
C774+

May 1899
no. 487

明治三十二年五月十日

女學雜誌

第四百八拾七號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十七號目次

◎社説
婦人論の流行に威張る可らず
新嫁入仕度
高等教育會議今奈何
俗吏の習慣を承知すべし
耶蘇教と國躰

◎家庭
女子の道（福羽美靜）
二宮尊德翁の道歌
安心和合は理財の基
大もうけは大損の種
妻の不平

◎文藝
許六が旅の賦

◎雑錄
江聲山色（白水郎）
（勿來沿海。馬陵城下。安達太郎山。猪苗代湖畔）
鬼面百相（共五）青柳有美
近松女氣質（共五）（櫻井鷗村）
霄庚申のお千代

◎随感
花ならぬ華○天下人世のひろさ○自ら安んぜざるの怯○何事にても成さんとの自信○蠻勇

◎寄書
暮れゆく春の哀を思ふ（知津子）
浮世の光（藤原母村）

◎時事
女學論の爭
私立學校令

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を事にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雑誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	（内國無郵税）	
	◎代金は總て前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共斷無之間は引續き發送することも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事	
廣告料	一行（廿七字詰）一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし、郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし	

明治三十二年五月九日印刷
明治三十二年五月十日發行
發行兼編輯人　嚴本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雑誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

嚴本善治編

海舟餘波

一冊三十錢
郵税四錢
郵券代用三十七錢

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聽き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど堆を成せり。蓋し世上大率ね幕臣の勝安房守を傳えて、偏に其奮功を賛す、素より是れ可ならざるに非ずと雖も、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府明々し　あらずして、反て明治新政府の渡持建設にあり。但夫れ先生能く形跡維没し、功名を譲り、巧に韜晦して攫をの評を避くるの故に、當代多く之を知さる斗、今や先生一去して亦之を秘するの要なし。此書、主として此般の消息を傳ふ。坊間既に一二の著書あり。略ほゞ梗概を言へる者の如きは、此書皆省き、凡そ先生の事業言論にして未曾て世に出てず未曾て世の思到せざるれを輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加へさる也、又別に先生の寫眞を添ゆ。是れ最近の撮影に係り、コロタイプにて製作す、銅版鉛版をもて比す可らす。眞采歴々、光姿爛として而あたり接するが如し、又先生終焉の文稿一篇を寫眞版に附し併て添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝するの日、先生自ら偈を作て弔する者、其辭悲痛、達人知己を惜むの情、流露澎湃す。今ま斧削の痕點々觀るべく、眞に一代の珍なり。又康有爲に與ふるの書及び金貨本位制に對する建白文の如き、眞に先生平常の苦心慘憺たるものを見るべし、併く附錄さす。如今版成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。

東京巣鴨庚申塚　女學雑誌社
發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂

女學雜誌

第四百八拾七號

明治三十二年
五月十日發兌

社說

婦人論の流行にて威張る可らず

如何なる風の吹廻しと云ふべきか、婦人論近來の流行は、久しく見聞せざりし所ろなり。大新聞、小新聞、鄙、都、一齊に叫び立て、反響また反響を喚び起して、四面、鯨波の聲を揚るが如し、而して、其の調大抵同樣にて、惣べて女の肩を持つにあらざるはなし。去る數年、女は甚はだしき冷遇を蒙むり、世上の論客中、其の屈を伸べ、其の寃を雪がんとするものも稀なりしに、一陽來復、春風自づから來りて、目今の狀態斯の如し、無論、慶せずんばある可らざることなり。

然し乍ら、男女の關係は素と戰爭をするにあらず、間隙を窺がひ、機會を察して、一歩一柵にても進擊陷落すれば乃わち勝を獲たるものと、誇るべき筋にはあらず。價の高き間だに賣り放ち、評判の好き內に得意を殖やすと同樣の見識にて、只だ一と時の輿論を當てにし、賴母しからぬ贊成を末永きものと誤解しては、他日の不覺悟なるべし。世上方今の喧しき婦人論者は、何故、或る時には冥として默し、又或る時は落雷の如く叫ぶことにや」たとひ續かざる好意なりとも、好意は惡意よりも好し、一時の贊成なりと云ひて、之を棄て置く可きにあらざるは、申す迄もなきことながら、之に謝し、之に慶することはすれども、之に委賴す可らずと云ふこと、吾人が肝要の說なり。

之に委賴すること、既に拙なきものを、之に依つて威張らんとするものあるに至ては、沙汰の限と云ふべし。世上の論者、故さら矯激の言を放ち、極端なる事例を掲げて、熾んに世の視聽を驚ろかさんとするに方りては、男子攻擊の筆法、其の規を越え、之はまた余りに女の肩を持ち過ぎたり。斯る度に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

過ぎたる女權論に呼應して、身を躍らして飛び出づる族は、大率ね輕卒なる似而非女丈夫なり。其の聲沈痛にあらず、其の調、深酷にあらず。一種輕挑なる空論をもて、暴りに女性の爲に慷慨し、有もせぬ涙を揮つて、大に世上に訴へんとすなど言ひ觸らすの結果や、寧しろ眞摯にして誠實なる婦人論の害を爲し只唯だ無益なる反動を挑發して、眞の進歩を防たぐるとあり。心あるものの歎惜して止まざる所なり。

凡そ、過度の壓制は、過度の主張を喚起し、過度の主張は、亦た過度の反動を搖起す。もと是れ免れがたき數にして、吾國民俗の特に脱しがたき一僻なれは、輿論の調子の千鳥足にあゆみて、高低左右の中を得ざるは、今更ら驚ろく可きにあらずと雖ども、心あらんものは、能く此の弊に覺悟して、其過まちに乘ず可らず。謹しんで、其の趣むく所ろに勘辨し、苟しくも輿に乘つて浮かるるなどのとある可からず。

山は、其の頂に達すれば則はち下り路なり。事物の一盛一衰亦た斯の如し。其の衰ろふるや、赤誠之を維持し、熱血之を挽回せんとす、故に亦た盛路に向ふ。其の盛んなるや、輕人之に伴隨し、時人之に向迎す、故に漸やく衰運を來す。此を以て物衰ろへて亦た起きざるはなく、事盛んにして亦た倒れざるはなし。仔細に此の天理を考がへずして、只だ徒に勢の奴たらんとするものは、悲しひ哉。

吾人、淺小の經驗によりて之を念ずるも、婦人界に近時の狀態あらんとは、大抵、預測したる通りにてありき。高等女學校全盛の時代も既に來れり、婦人論勃興の時節も今や來れり如今正さに其の絶頂に達せんとせり。將來の前途、亦た掌紋に指ざす如く明らかならずや。

今にして、婦人の爲めに種々の事業の新たに起らんとするは太はだ祝すべし。之れ盛運の春時、まさに万木草叢の芽を發すべき時なればなり。左れど、順境に滿帆を擧げたるものは不時の天候に備えするの用意乏しきもの也。今の春景色を一年の常と思ひ、只だ無用意の隆盛を期圖するは、他日の反動を招く最先の刺激たり。識者は預かじめ警戒する所ろなかる可らず。

聞くが如き熾んにして飛拔けたる婦人贊成の議論は、只だ男子社會一時の余興と見做し、心得ある婦女子は之に乘せられて胸中の覺悟をゆるふするとある可らず。苟しくも實力ある

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時は、人之に待たざるを得ず。眞に貞德ある時は、人之に服せざるを得ず。隱れたるは必らず顯はれ、鬱したるは必らず開き、屈みたるは必らず伸ぶ。物の憂ふべきは、我に存して彼に在らざるを知りつらん人は、須からく先づ自己の修まらんことをのみ專要とすべき筈なり。左れば、今の好機會に於ては、他の何者をも賴みとし、他の何事をも求めとする勿れ只だ能く學び能く修むるの機會を與へられたりとなし、以て自から厚ふするの工夫を遂ぐべし。斯して其身實際に畜積涵養する所ろあらば、自然の光明は如何なる場合にも煥發し、以て永久長遠の進歩を來さん。之を婦人論の實地の獲物とはするなれ。

◎將軍が大阪で、なくなられて、棺の中へ色々入れる時にネ、フト、和宮からのお手紙があつた。夫を入よふとしてフイと見て、ビックリしたよ。其精神の凛乎たることと云ものは、實に驚ろいた。「一旦、德川氏に嫁した以上は、德川氏の爲に生命をすてる。お還りの早いとは、一日千秋の思ひでお待ち申すが國の爲に速に凱旋あるやうに」と云ふ意味サ。

◎御一新の時でも、和宮を率ゐて騷がふとしたものがあるが、宮が泰然として居らして、少しも心配はなかつたよ。おかくれの時でも、「決して皇室の方に葬るナ、是非、德川氏の方に埋めてくれ」と云ふ御遺言だ。(海舟餘波)

新嫁入仕度

人と對面するに裸躰の儘なるは不躾この上なし。嫁入は身を提さげて他人の間に入り生涯を新らしき關係の仲に割り込むものなれば、相應の身の廻りを調のえて耻かしからぬ丈けの裝ほひを爲すは、禮なり謹しみなり必要なり。而して、其の普通一と通りの調度如何んと問へば、世上なみ〳〵の準備を目安にして十家一樣の仕度と云ふものあり。定まらぬ人世に在つての定めにして、天下自づからの相場と爲す。俗に、簞笥、長持と云ふは、其の入れ物の概畧なり。夏冬當座の着物式時の襲ね一そろひと云ふは、十目の視十指の勘定して普通莫る可らざるものとする所以なり。左れば、此の世間並の用意調はざるを『裸躰の儘』と稱え、自から多少のヒケと見做す。假令ひ、此の引ケを顧みずして雙方拍手納得することありとも、そは別に之が償ひとなる丈けの理由あることにて、所詮は世の相場を蹂躪したる譯にはあらず。

扨て此の嫁入仕度の中にて、心の無形、手業の伎倆に屬するものの準備につきては、昔しは縫針一と通り、並びに女大學

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の心得如何と云ひたるとにて、親々の申出は謙遜の中にも自づから之れ丈けの躾は卒業させたりと保證するを常としたり然るに、女大學の心得と云ひても寸尺をもて度る可らず。縫針一と通りの技と云ふに様々の標準あれば、此の相塲は定まりたるやうにて定まらぬ所あり。簞笥長持の有無をもて直ちに目算を立つとは大なる懸隔ゆへ、詮ずる所ろ銘々の目分量に任せ、有也無也の間だに評價をきめて別段の苦情を申し立てざりしとなるが、此の一事に關しては輓近大いに趣むきを變え、世間一躰の注文は全たく新らしくなれり。

そを何事ぞと言ふに、緣談の際双方より互ひに尋問する一ヶ條に『學校卒業』の有無を問ふとなりたると是れ也。宛がら古しの緣談に、男子の方には修業の目錄を問ひ、女子の方には躾方の有無を問ひしと同様の格にて、士人以上、今時の中以上の身分に於ては、是非口頭に上る所ろの要件なり。但たし、女の方に對して、女學校卒業の資格を問ふの一事は今尙ほ普ねからざる様にてあれど、流行の大勢は夙に一定し、心得あり身分あり格式ある良家の緣談には、追々其の要求を増し來るは爭そひがたき事實なり。況してや、高等女學校程

度、即はち女の中學程度の教育殆んど普及せんとして、天下年ごろの女子を持てる中以上の父兄は、今ま大抵此の教育を與へんとしつつあるとゆへ、凡そ之より四五年の后には、右資格の一條を問ひ質すとは世間一般の流行となるべし。

扨て、昔しの躾方は寸尺にて度りがたく、目方にて掛けがたし、即はち曖昧の評價の行はれ易く、仲人口にて取計らひ易き所もありつらんが、女學校に在りしや否や、之を卒業せしや否やの問は、余りに明白なる質問にて、事實を隠さん様もなし。今后此の資格の有無を問ふと世間一般の流行ともなりなんに、父兄にして其女に此の躾を與へざるは、嫁入仕度の一大要件を欠き、其の愛孃を裸躰にして、十人並の装ほいなきものと吹聽すると同様の事なり。娘の恥辱は言ふも更なり親たるもの丶不覺悟は眞に辯解の道なかるべし。

凡そ、假初の花見にすら我娘に相應の化粧させたしと思ふは親の人情なり。人中に襤褸を下げさせ、一と通りの帯すら纒はせぬは如何に苦しきとぞと承知せる族にして、追々世間の風儀一定し是非無る可らずと沙汰せらる可き嫁入仕度の準備もなくして、彌々年頃になりたる曉、裸躰同様にて人中に出

し、生れもつかぬ片環の一人として、談判にヒケをとり、吾より容赦して、他人に自家の不覺悟を謝せざるを得ざるは、何等の遺憾ぞ。もし他日に此の恨みなからんと思はゞ、今より普通一と通りの女學は修めしめざる可らず。之れ明治年代の女の新嫁入仕度なり。親は之を與へざる可らず、娘は之を所持せざる可らず、双方決して油断あるまじきもの也。

高等教育會議今奈何

高等教育會議の價値は、其の開けざりし以前より大抵は分明なりき。識者は初めより重きを之に置かざりし也。然るに、空想の徒、過大の思惑を掛け、實事の社會に於て決して獲可らざる注文を要求せしに、其の注文の如くならざるは素と當然の事ゆへ、今にして初めて高等教育會議を非議すべき筈にあらざる也。

近頃ろ、夙くも之が廢止を叫ぶものあり。嗚呼、亦た愚なる哉。今の之が廢止を必要とする者は、曩の之が創立を必要とせし者なるべし。同もに過大の要求を掛けたる者に外ならじ。もし斯の如くんば、何事を求めても均しく空想にして、其の實地に不滿足なると何の時に於ても亦同じかるべし。

本來、衆議を集めて高妙なる決議を得んとするは誤まりなり。實際の行政に、衆口の注文に束縛せらるゝは誤まりなり。斯る辯論は、實地に緊要ならざる空漠疎大の問題に關してのみ些との効力あり。例へば、教育の方針を一定せんなど囂々たる辯士に對して恰好の討論題なり。素と實際の政事に用なき所以を知らざる可らず。

夫れ、高等教育會議は、其の未だ開かざりし日に於て豫かじめ察す可りき。今にして亦何をか驚ろかんや。吾人の見る所を以てすれば、今の高等教育會議は、其の性質固有の分に對しては寧しろ好結果を示すと言ふべし。斯る會議にて相應の人氣を引き、世上より彼此の批評を受け、隨がつて議員も勉強して銘々の説を吐くに勇ならんとする狀態は、甚はだ多とすべし。兎に角、教育社會の調子の如何なるかを曝露して、其輿論の假面を脱し、以て其の眞相を世間に發表する丈にて、既に十分の効力ありと云ふべし。

素と斯る會議に過度の要求を爲せばこそ、今にして亦た之れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を廢せん等言ふ也。之を廢して何等の別案ありや、たとひ幾度び改廢すとも、凡そ會議なるもの、性質は常に斯の如きものたることを承知せざる可らず。果して然らば、亦何の要ありて更めて之を廢せんとはする乎。年々の入用は些少にして、財政に影響あるにもあらず。教育社會兎に角一つの噴火口ありて、のろき火力の多少の氣焔を揚るに便なり。之を存するは廢するに優る。廢して亦た騷々しく徒勞を繰反すよりも優れり。吾人は素と其創立に賛成せしものにあらず。然し乍ら、既に成立せし今日、更めて之を廢せんとするほどに熱心なるものにもあらず。苟しくも大害なき以上は、既に存せしものを其儘に保存するを經世の要とす。

俗吏の習慣を承知すべし

西洋人の諺に、虚言に黒きと白きと二つあり。黒き虚言は、眞らしき虚言にして、眞の虚言なり。白き虚言は、虚言らしき虚言にして、虚言の虚言なり。虚言の虚言は、君子太はだしく之を咎めず。子供の談話に於て之あり、大人の冗談に於て之あり、世間實際の事務に於て之あり。事務に於て之ありと云ふは如何ん。所云ゆる世辭の虚言に類するもの即はち之れ也。人間蠢々として群がり、互ひに我儘の内に交捗し、不理屈を隱して、理屈の下に濶歩横行す。其實は扨て置き、其名を美にせんとするは、彼等が虚榮の痴態なり。素と責むべきほどのものにもあらず。

此の弱點の尤とも完全に發表されて、極めて巧みに修飾さるるを官省公儀の事務に於てとす。其の應接、其の問答、其の規律、其賞罰、皆な裏の裏あり。表面に堂々たる名を立て、裏面に人の弱點を許し、以て事務の融通活達を計るは、此の社會に於ける公然の秘密なり。例せば、病氣屆の如し。屆けるもの病氣と稱し、聞くもの病氣と見做す、眞とに嚴然たる規律なり。而して、彼等は既に默許默識して、微笑して相許し、官省の歸り途に置酒して樂しむこともあるべし。官省の事務を扱ふものを俗吏と云ふ。俗吏は、斯の如き社會に在て、表面の威嚴を維持し、所云ゆる官規振肅の名の下に、大義名分を守るもの也。言ふもの既に一種の意味あり、聽くもの亦た其心なかる可らず。之れを正直に解釋するは、愚

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の極と云ふべし。

然るに、今の俗吏は、此の俗吏の分限を知らざるもの多し、之れ新らしき俗吏にして、官省の事務の性質に慣れざるに由る。而して、此の俗吏を責めんとするものも亦た俗吏の眞相を知らず、太はだ眞面目に扱かひて反つて事務の進行を害す、同もに笑ふべきヿとす。

近頃ろ、學校の設立者に云々の資格を置んとする由の議案出でて世上騷々しく論ずるものあり。抑そも此の案の起草者は愚なる夢を夢み、偏狹なる國家論に制せられての主張に出でたるかも知る可らず、即はち本氣の沙汰より出でたる一種の熱心なるやも知る可らずと雖ども、大凡そ俗吏の社會に斯る要求の出んとは、當然の理にて今更ら驚ろく可きにあらず。官省紙上の規律に於ては、間ま此類の制裁を存し、口實上の取締を付け置くの必要もあるべし。故に聞くものも亦た別段の大事と見做して騷がしく是非を論ずべき程の事にあらざるべし。

假りに、資格を定めたる設立者を要すと規定せば、何れの學校に於ても、此の資格ある人物を名義上に於て雇ひ置くは雜作なきヿならずや。外國人の設立する學校なども少しく報酬を增して之を需めば、之に應ぜんとするもの雲の如くなるべし、毫も不自由を感ぜざるヿならずや。

否な斯の如き虛僞は官を欺むく不届の處置なりと慷慨するものありとも、現に此類の虛僞は滔々として行はれ、文部省も遂に防ぎ得ざるに非ずや。凡そ今ま資格ある敎員若干を必要すと規定せる學校に於て、現に其人あるものは甚はだ少なく、大抵は名義を借れて公けの始末を付け置くの實況にあらずや。文部省たるもの、現に之を默許す、後に於て亦た夫れ之を如何んせんや。

故に、文部省に於て此類の布告を爲すときは、たゞ表面上の儀式に過ぎず。之を聽くものも、亦た表面上の扱ひに止むべし。無雜作至極の事にて、更めて是非を論ずべき程の價値あるものにあらず。

然し乍ら、外國公使は一應之を不可とする旨の申込を爲すなるべし。之も亦た儀式一遍の事にて、表面の交渉に過ぎず、本國政府と、本國人とに對する表向きの言ひ譯を主意とするに過ぎざることなれども、奇しむべきは、此時に限り、日本

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人たるもの、之を眞面目に受けて、直ちに正直一邊の挨拶を爲さんとすると從來其例多し。故に、今回の事の如きも、果して實際の布告と迄、なるべきや否や、尚更ら不確かなり。今にして之を氣にするは、尚以て馬鹿らしきと也。果して然らば、文部省などに於て、もと〳〵斯る案は出さゞるが至當なりと言ふものもあらんなれども、現に其案出でたるとき、多數の之に贊成せしによつて、目下輿論の表面を察すべし。之に贊成せしものも、內心は贊成せしにあらず、亦所謂ゆる表面の儀式なり。夫れ、此の儀式表面に行はるゝ時世に於ては、文部省の俗吏たるものが、此の儀式に隨ひて表面の取締を立てんとするは、固より至當（俗吏相應の至當）の事にあらずや。識者之を責めざるを可とす。責めざるを以て其の悟とす。

此に至てか、靑年氣慨あるの徒、憤然として怒り、痛罵して世の腐敗を歎ずるを常とす。然し乍ら、斯の如き靑年が學校卒業の后、もしくは鼻下に髯ある頃、大率ね相率ひて亦又此の俗吏の同類たると多き事實に經驗あるものは、容易に彼等の慷慨に耳を傾くるものにあらず。

凡そ、眞の改革と、堅實なる進歩とを希ふものは、斯る些事に屈托するものにあらず。何れの世か俗吏なからん、何れの世か、白き虛言なからん。亦何れの世か慷慨論なからん。卓然として達觀し、大俗に容赦して別に至大の經綸あらんとする者、何んぞ區々として此輩の俗論を氣にせんや。

耶蘇教と國躰

耶蘇教の善惡は別問題とし、國躰に合するや否や、大いに講究せざる可らず」と言ふものあり。當今識者と稱せらるゝ輩儕の間だに、普ねく行はるゝの疑問とす。

此の疑問を決するに先だち、二個の問ふべきとあり、

一　凡そ善きものにして而して國躰に合せざるものありや。若し之あるとき、尚ほ之を善きものと言ふ乎。

二　假りに之を善きものとせん、而して、外國に於ては可なりとせん。尚ほ、外國人の雜居を許し、外國人の歸化を許し、外國人と濶達なる交際を結ぶとせん。而して、玆に、耶蘇教は斷じて國躰に合せずと決定せし爲、論者は一毫も其

行なはるゝをば許容せざるを得る乎。
吾人の特に問はんとする所のものは、耶蘇教果して其の所謂ゆる國躰に合せずとせば即はち如何んせんとするやの問題これ也。
當世の論者が此の疑題を提出せし以來既に數十年を經たり。常に曰く、國躰に合するや否や一の疑問なりと。斯の如く、疑問々々と言ひて、未だ嘗て其の決着を附けず。眞とに、氣樂千万の事と云ふべし。若し眞に國躰に合せずと知らば、換言せば、日本帝國の荼毒と知らば、一日も猶豫するとなく、斷然とし拒絶し、其の信仰を防害し、猛烈なる手段を以て之を禁止せざる可らざるに非ずや。
然るに、國躰に合するや否や疑問なりと思ふほどの大問題と認ため乍ら、未だ嘗て之を研究するの誠實を有せず、研究々々と言ひて未だ嘗て之を決着するの勇氣を出さず、多年揚言して一種の面を冠ぶり、輿論に反對するとも出來ず、衆望に反むくとも得せず、單に流行に浮んで暫らく國家論者の名を得んとす、卑劣も亦甚しからずや。
彼の耶蘇教の徒に醜なるは、動もすれば外國の勢力を利用せんとすると是れ也。彼の反耶蘇教の徒に醜なるは、動もすれば戀舊の輿論に追從せんとすると是れ也。眞とに是れ恰好の相手にして、五十歩五十歩の相ひ笑ふに似たり。
惟ふに、彼の國躰の語は、國風の語を以て換ふべし。所謂ゆる耶蘇教の國躰に合せざるかを疑ふの疑ひは、舶來耶蘇教の國風に合せざるとを嫌ふの疑ひならめ。此の事や、至當の嫌ひにして、亦た尤なる疑問なり。誰か、舶來くさき耶蘇教の風俗を好まんや、喩へば、洋行歸りの生意氣を好まざるに相似たり。
然し乍ら、斯る事は些末の事にて、もと感情一邊の事のみ。之を嫌ふの情も、追々少しは和らぐべく、彼の嫌ふべき風俗も追々少しは減ずべし。其の相近づくに及んでは、國躰に合するや否やの疑問を叫ぶものも、知らざる間に減ずるならん。此に到りては事一睡の夢に歸し、牛肉の日本料理に適するや否やを討論せしと同樣の始末とならん歟。果して然らば、今の論者をして當分、國躰に合ふか合はざるかと自から叫ばせて、以て暫らく其名を爲さしむるも、亦或ひは可ならん。遂に之を罵しるの價値を見ず。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

家　庭

女子の道

稲羽美静

元々居老人稲羽先生の說を聞く每に、其の規摸の宏壯、立意の潤大なるに歎ぜずんばあらず。維新當年の論客にして今尙ほ這般の大論を發する人、幾何かある。近頃、小林大次郎氏、一種の理想を抱きて、新たに商店を開かんとし、悉皆、女子をもて其事に任ぜしめんとす。志ざす所、厚しと云ふべし。元々居老人、乃はち之に寄するに、左の長歌を以てし、題して『女子の道』と名づく。吾人之を誦するに、眞とに女道の要緊を說けり。依て、乞ふて左に掲載し、紙上の同人に示すと云ふ。編者白す。

婦女子の道を殊更に　のぶるも今の要用と
おもへばそれよ左の如し　そも〳〵明治のこの御世は
百事擴張文明の　進歩を促がす時として
女子にはそれにまたひとつ　しらで叶はぬ大事あり
中古の武家のその時代　女を殊にいやしみて
國の中なるかくれ人　おもてにたちたるその武士の
奴隷のごとく取なして　その上世間を愚になして
太平裝ふ時なれば　女子の第一婚姻の
道理をくらまし表には　てう〳〵しくもその儀式
そなへながらも其實の　緣は双方空虛にて
只仲人のなし次第　しかれどこれを正式に
俄に直さば弊にまた　弊をかさぬる恐れあり
能々つゝしみ正眞の　德をそなへし婚儀法
それにすゝむぞ肝要よ　能々つゝしみすゝむべし
猶また女子は分別も　智識も入らぬものなりと
いふ口くせは武家よりも　先にそなへし漢學の
弊をも自然とうけしもの　これを改正せずしては
日本の古道人のみち　その大本にそむくなれ
神代のむかしそれ〳〵の　男女わけもち物皆の
德をおの〳〵そなへ來て　神武天皇そのみかど
父は神代の御正統　母は海神そのかみの
すゑをあはせて一段の　高き帝位をはじめまし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つぎ〳〵男子女子の徳
なすべきときは決断し
心がまへも入用ぞ
その正道をふまんには
出すべき時は誤らず
わきまへ出してかゞやかし
徳義を子どもに又傳へ
國にむくいてつぎ〳〵に
兒童青年それ〳〵の
つくして示すことながら
その敎育はもつはらに
大事小事を分別し
よろしき道をとりそへて
舊弊すてゝ廣大の
無邊の德義を守るべし
一時の事情にほだされて
あるひは德義をやぶるかど
これはかならず從前の

女子もすなはち決断を
武勇を張るべき其時の
之れをおもひて夫婦たる
必勇氣も愛憐も
智識をそなへて其用を
家をもおこしその末に
子どもの繁昌それをして
さかんなる世をつくるべし
學校敎育才德を
家に適する細密の
母の仕事とおもひつゝ
祖先のをしへにその時の
忠孝慈愛こと〳〵く
國に應ずる智を磨き
やゝ智識あるその人も
その改正をやゝ拒み
うたがふ人も數多し
鎖國姑息の時代なる

心かよわき敎訓に
しらず〳〵もその弊を
東海日本の婦女の道
それやまと姫そのつたへ
神功皇后嗚呼たふと
橘姫の義勇あり
必女子よ書をよみて
人の要用第一は
その衣食住三要は
つぎ〳〵高度をとるものぞ
事を勵みて誰もみな
万事はそれに應ずるを
無用の奢侈は皆敵ぞ
はらひ〳〵て皆すてよ
ウッカリ心を輕くして
誤る恐れをおもふべし
無用の卑下を皆すてよ
國に對する大道を

育ちし人の末なれば
すてかぬるよとおもふべし
伊勢の神事の大初たる
國事の大事を身にうけて
身をころしても忠と貞
これ皆歷史にのせてあり
女道をます〳〵みがくべし
衣類食物住居なり
時代〳〵に皆のぼし
それを自然の風として
身上堅固を先となし
よろしきことゝおもふべし
もしも心に生じなば
猶も勵みてあるべきは
辯智の人にのせられて
それに猶また固陋なる
それをすてじとする人は
おもはぬ人となりぬべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

忠孝仁義愛憐も
誰も心をつくすべし
革命國にあらずして
世界の善事を皆とりて
よろしき方に改むる
これを心にこめ〳〵て
人事の程度を高くなし
世界に顯はすことをしも
笑ひを含みし溫和には
正しき時に嫌ひあり
和して流せず圓滿の
家庭の事も敎育も
いしずゑとなし柱とし

成丈大なるその方に
日本帝國わが國は
革運といふ時ありて
禮儀風俗政事まで
先例歷史につぶさなり
內外人々もろともに
ひいでし國をます〳〵に
人のつとめと覺悟せよ
自然と惰弱の風ありて
芳平としたる愛敬は
おもきを示して力あり
これらの事を辨へて
身をしたつべし婦女子人々

田を深くよく耕してやしなへば祈らずとても米やみのらん
くもられば誰が見てもよし富士の山生れ変で幾世ふるとも
音もなく香もなく常に天地は一切經をくりかへしつゝ
見渡せば遠き近きはなかりけり己れ〳〵の住處にぞある
あゝ〳〵と往來の人のおのづから足のとゞまる花の山哉

二宮尊德翁

安心和合は理財の基

一家理財の基ひは安心和合にあり之を欠けば我他彼此と騷々しく万事落付かず物皆な衝突して破損頗ぶる多し臺所の茶碗のこはれ方箒の柄の折れ方障子の紙の破れ方より塵の積もり方器具のよごれ方下駄のちび方鼻緒の切れ方に至る迄驚ろくべき相違なり況んや人心折合はず氣合調和せざるゆゑ一事一物を爲すにも人の力散々にて十の力も五つとなり左右に邪魔して互ひに勢力を減ずると多し使を出すにも命じたる後より亦命じ還りたるを亦送り無益の徒勞多し人々の腰落付かず何となく心の家を他所に求め天の一方を望んで數ば慨歎する樣にては万事を爲すの愉快うすく氣の張も弛めば熱心の減ずるは固よりなり凡そ樂みは家庭の樂しきより樂しきはなく凡そ御馳走は樂しみ乍ら飮食するより甘きはなし然るに二六時中心に滿足せざる所ありて食膳に向つても無形の樂しみなくば腹中に充たしがたき穴のありて入れても〳〵埋めがたき欠所を覺らん斯くして其の平生に安んぜず其の現在に滿足せざる心こそ不經濟の根本にて餘計のむだ使ひも存外の失策も不慮の

山師事も大抵は此邊より淵源するものなり近く一例を擧んに下女にせよ下男にせよ此家に長く奉公して一生出世の門出になし後には立身の故郷にせんと迄で思ひ込むときは其の心は最早や雇はれ人にあらず第二の家族の如く其の水の酌み方も鄭寧にして井戸側釣瓶の痛みも違ひ竈にくべる薪も澤庵桶に置く石も流し元に流す洗ひ流しも大層の相違となるべし之は主婦たるものの直ちに經驗する所ろなり此の事たゞに雇はれ人の上のみならず後には他家に嫁せんとする小姑兄弟もしくは居候厄介もしくは主婦たるもの本人に至る迄で皆な此趣きのもしくは息あり腰据わらざれば足重く心定まらざれば氣重し眞とに吾ホームと思はざる家に他人らしきは人の免かれがたき所ならずや、左すれば第一にはホームを信じ愛して之に安心し之に落付て和合し規律を整へ調和を計りて家の内靜けきにぎやかさと云ふものを生ずるやうにてあるべし沈着したる爽快安心したる騷ぎ氣樂なる物言ひ遠慮なき活潑にて戸内に一種の整理存せば衆の心自づから和して經濟は自然と調ふべし苟しくも此の根本より着手せざる經濟は一時儉約の樣にても思はぬ所に穴を生じ知らざる間に大損を來すなり尤とも懼るべき事なり故に眞の理財家は先づ人心の和らぎに着目す和らぎなき經濟には何處か見えぬ所に不測の禍機潛めると見做して決して油斷するヿなし。

大儲は大損の種

開きたる花は莟めがたく氣の大きくなりたるは縮めがたし一時の僥倖に大まうけするものは之を常の事と思ひ金錢を粗末にし身の奢に長じて始末のつかぬもの也夫れ故相當の利に安んずる間は大まうけもなく亦大損もなく年々少しづつ積りて知らざる間に堅固なる身代となり最早決して動かしがたき土臺を据うるヿなれども不時の利益過分のまうけに望を置くものは迚も堅牢なる身代をつくるヿの出來ぬ者也中には手堅き商賣をゆづられ月々年々の收入確實にて眞とに結搆至極の事なるに偶と投機相場の類に目をつけ誰は一時に何万圓利益せしなどの談を耳にして心浮き立ち飜つて我家の營業を見れば如何にも小さく十年此まゝの利益ありても高の知れたるものと勘定して俄かに氣を大きくし一攫千金の仲間に入りて之を

男の商賣と得意がるものあり心構えの小さきと不憫の至りと云ふべし然れど此輩にして幸ひに初手に損をすれば尙ほ祝福なれど運命は斯るやくざものを弄するにやあらん大抵初めは不思議の利益あるものゆへ俄かに吾器量を發見したらんの見察にて急に紳商となりすまし錢勘定は万を以てし一年に何万何十万の利益ありたりと吹聽して世間の正直者を古風の氣の小さきものと嘲けり文明の商賣は即はち斯の如しと動ともすれば演說せん斗りの大抱負なり然るに慣れむべし大まうけは大損の初めと氣が付かず一攫千金の裏には一擲万金あり上るとり熾んなるものは下るとも亦早し株の身代は株に止まり紙ッペラの身代は紙ッペラ同様にて數年立たざる間に必らず一度の逆境あり此時大抵は失敗するとなれども辛くも之に耐へたるものは亦其次に失敗せんとす若し能く之に耐へたるほどの老猾ものも一生眼を閉づる比には大抵はボロを出すもの也夫を自から言ひ分して身は斯く失敗するも社會に文明の器具器關を創立したる功勳はあらんなど誇るかは知らねど凡そ器具器關の進步は徐々自然と進みてこそ初めて効能あれ國勢に適當の發達を爲し國民堅牢の事業と手を引合ひてこそ初めて

其の實業に功を爲せしとなるに只一概に新らしきものを造りたりとて國の身代相應國民の身分相應にあらざれば何の甲斐なきと也然るに前述せし紳商流義の事業は毫も此邊深奥の妙諦に頓着なく只だ西洋風の文明器械を入るれば即はち國家に功を立てしと思ふと誰やらの政治と同類なれば後の日本人たるものより見られては忽まち其の眞價値の分るとなるべし夫れ我一己と我一家を沒落して當分榮華の夢を見たるに止まり其子孫はなまじひに奢りの習慣をつけられて乞食するには乞食工合の惡しきほどにせられ株主と云ふ所々より金を出せし連中も亦た同一の迷惑を蒙らんとするほどなるに抑も何の功勳ぞや然るに此人の大失敗の元は初め其の不時不當なる大まうけせし故と悟らば大まうけの太はだ危險なるとを知るべし故に巨商は利の大なるものを擇ばずして利の小さきものを撰ぶ其の志遠大なるゆゑ也丈夫志を立てて國家の事業に任ぜんほどのものは抱負洪遠にして身を處する謹嚴苟且にも不時の榮華に眩惑すまじき筈なり夫故たとひ一時に大利を得るとも之は利益と思はずして豫算外に置き確實なる利益は確實なる營業より出づると同様の利率即はち田畠山林公債なぞと同様の

利率にてあるべき所以の理を辨まへて斷じて心の緒をゆるむると莫れ斯くして我心も据わり我家風も定まり我家族も之に慣れなば財政の基礎確立して長遠の計成れり未だ此に達せざるうちの穴もふけは惣べて一身一家の災と見做すべき也。

妻の不平

拙なき賤の女

嗚呼、戀ひしき哉、むかし世を知らぬ無邪氣の乙女にてありし折りの樂しさよ。色よき衣を見て顏赤らむまで悦び、一夜まんぢりともせで、夫に似合ふ帶の紋樣を考へし此の樂しさよ。

同窓の友と、ふとしたる事より互ひに打あけ、行々の事を打語らふと見せて、遂に心中の秘め事を語り、今まで誰にも見せで包み乍ら何となく亦た見せたきやうに感じつる吾心の誇りを打あけし時のうれしさよ。念ひ起すだに若やぐ心地して、學校のあの時の木かげの色の美くしさよ。身をかゞめて指にて摘みし草のゆかしさよ。

左るにても、初めて彼の心の起りし時は、我乍ら如何にせし彈機のありてかと、今も尚ほ疑はるるなり。神の結び玉へるとも言ひたけれど、惡魔の弄そびしとも言ひたし。何の譯もなく、忽まち雷霆の如く轟ろき、全身俄かに熱發したらん樣に覺えて、顧りみれば我が心すでに一變してありき。如何に取り返さんとしても取り返しがたき迄に、あの時物狂はしく覺えしは、迷ひなりしか。人は年とりて物事を一度經驗せし後ならでは、後に如何に變はらんとするやも分明ならず。然し乍ら、あの時全心に熱愛して、ちとの間隙もなく思ひ込みたる吾が忠實を再たび得たき哉。吾は人の惡るくなりしか、吾は不貞實となりしか。何とて斯く心中に穴の出來て、埋めがたき胸中ぞや。胸を狹めたし、心を一つにしたし、再たび迷ひたし。

初めて家と云ふものを持ちしときの記憶は、幼なき時にままさん事せし折の記憶と一つになりて、生涯いつ迄も忘れがたし。人の見る目も耻かしからず、心一パイに盡して、仕へ參らせし時、吾が名を言はれて用事を命ぜられし時、傍らに人なき食膳に唯二人向ひし最初の時の事など、吾全身のむしり取られ、吾心の碎け了らんとも、忘れん方なし。今ま其の妙

味は再たびするとの何故難きや。何處に詩歌ありや。幻影追く々に失せて、物事に算盤の音のみいたし、何事にも帳面の數の文字現はれて、狂はしかりし樂しみは、何の鄕に向つて飛びゆきしや。還れ、還れ、還れ、還れ、吾が可愛のまぼろしの姿よ。

吾が我儘とは知れども、つひに我が儘にならぬ恨み哉。餘りに御優しければ、少しは打叩き玉へとも思ふ程なれど、少し眉に皺よせ玉ひても、世はあぢきなく、人は賴みがたきものと厭世の心兆ざす。此上にも愛し玉へと言はんは恐ろしけれど、さりとて其心やまず。あまり愛し玉へば、ひつこくて面白からず。少し波瀾をなど思へど、我身にかゝらぬ波を見たし。斯くあらせ玉へなど申すとの勿躰なさは、くれ〴〵も知り乍ら、夫のみ願ひなり。百も二百も三百も承知しつゝ斯く我儘を言ふと知り玉ひて、此の我儘を根こそぎ打たゝき玉へ、打たゝき玉へ。

りんき、しつとの忌むべきとは、人の敎にも聞き、物の本にも見、厭く程承知すれど、中々、全たく其心を消さんとすると能はず。彼の方の誠を知れば疑ふにはあらねど、第一の愛、最初の愛、他に散らぬ愛、凝り固まりし愛を、唯だ吾身一つに與へ玉ひて、而も、鷹揚に、淡泊に、磊落に、いやみなく、あらせ玉へかしと祈る心は禁ぜられず。外に出でて花々しく爲し玉ひ乍ら、其花の實は吾ひとり拾ひたし。其花は大勢に見せて羨やませたし。

吾郞ほどに誠なるはなし、吾郞ほどに技倆あるもなしと信ぜし、吾が心の忠實よ。今はた、ちらほらと弱點を見奉りて、殘念たとへん方なし。鬼となり、蛇となるとも、此上申分なき偉丈夫たらせ奉らんと思ふに、吾郞に左程の執着もあらせられず。口惜しさ言はん方なし。其の御心地の大いなるにや其の御望みの小さきにや。人に問はんとの出來ず、世に比べんとも出來ず。

御忙がしきは左るとにて、人の爲に盡し玉ふは有がたきとなれど、吾家の爲にも今少し時を貸し玉はれ。人の居らぬ時に、今少し靜かに語らせ玉へ。交はりの初めの語らひを今少し語らせ玉へ。今少しゆるやかにくつろがせて、吾が申しにくき言葉を聞かせ玉へ。某の家の主人の暇多さよ。某の家の御夫婦の出ありきの多さよ。我が家ほどに忙はしく。睦言の

折の少なきはあらじ。

衣服、頭かざりなどの御土産に悦こびしは、其品物にあらで、其の御心根ゆへと知らせ玉はずや。之を辨ぜざるを得ずとありては、さすがに腹立しく、また何とも申上げず。毎々斯るものを賜ひて、吾心の安んぜんよふに思し召すこそ殘念なれ。吾もてる惣てを賣飛ばし、着のみ一枚となるとも毫しも憾みなし。かゝるヿにて吾が胸中の慰さめの出來べきものと思し召すにや。

左り乍ら、他家の御夫人が立派に裝はせ玉ふを見そなはせ乍ら、吾身に念ひ到りて、如何に思ひ玉ふか聞かまほし。彼の裝ほひを賞め玉ひつゝ、我に何とも仰せなき折々は、吾が髮の毛を斷ち切りても、飾一つを增し、簞笥、長持、絹夜具一切を賣拂ひても、貴婦人など申す惣べてを驚ろかす美なる裝ほひを爲し、後ち一火に附して燒き棄てたしと迄で思ふ。

水火に入り、一死を呈し、古今にかしましき烈婦などとならんは、雑作なきヿに候はずや。夫を世の男子の方々が余りに賞め立て玉ふが片腹いたし。吾の難しとするは、温和しくして邪推なく、純潔にして耻らい多き乙女の姿とならんとの難きなり。命を召せば、今にもさし出すべし。此の命を召すほどの仰せなきが殘念なり。

女と云ふものを知りもせぬ男子がッベコベと女の事を知り貌に論ろひ、女は斯るものぞ、斯くするものぞなど高らかに辨じて、吾郎の之に和し玉はんとするこそ心得ね 女を知ろし召さずば、我も知り玉わじ。我を知らで、我が何ものを探り玉ふ。

世の騒々しきに勞れ玉ふ吾郎の御氣の毒さは、百も二百も心得侍べれど、女は家に居て煩らひなきものぞと思し召さん御樣子を見ては、勇氣も、根も、失せゆくなり。及ばぬヿにては候はんが、我等は男子に代りて、一度繁劇なる大事に當りたく思ひ侍る。日々の同じ、辛氣くさきヿにのみ屈托するも亦た尠なからぬ疲れぞと知ろし召し玉へ。疲れを辭せんとするにはあらず、知ろし召さば夫にて十分なり。

ありの儘に不平申して見よと仰せらるゝゆへ、先づ此れ丈けは申せしものゝ、中々心の万分一も述べがたし。所詮、あらん限りは言へぬものに候か。もし〳〵、たゞ此れ丈けと思し召さば、夫こそ此上なき不平にて候ぞ。

評釋　許六が旅の賦

長汀曲浦

桃青居芭蕉翁、俳諧道に正風の幽玄高雅の躰を闢きて、談林風の滑稽洒落なるを排したると共に、俳文の躰を創め、散文に於て、殆ど一紀元を起したるの觀あり。五老井許六が輯めたる『風俗文選』の一書は。蕉翁及同門十哲以下の文章を集めて、蓋し德川氏時代の文學の一異彩たりといふべし。

芭蕉翁の俳文は、其俳諧に於けるが如くに、體は平淡にして、旨、頗る幽玄、後人遂によく企て及ぶ處に非ず。其『奥の細道』と題する紀行文一篇の如きは血あり、涙あり、高尚雄大、而も亦沈痛悲壯の想滿ちて澎湃たり。降つて十哲の文章に於けるや、猶且、甚だ敬重以て三誦すべきありと雖も、往々にして、磊々粗放の形體を成すに勞して、却て、想思の幽致を損ずるもの多し。更に後世、横井也有の『鶉衣』に殘したるもの丶如きに至りては、所謂俳文の體を完成したると共に、徒に文字の彫琢に馳せて、情思の含蓄に欠く。

蕉翁の俳文は、其全集につきて見るべし。扨て今爰に、評釋を試みんとするは、許六が『旅の賦』なり。許六は、蕉門の翹楚たり。自ら許すに、俳諧の奥底に下駄穿いて入り込みたりとし、正風の血脈を傳ふるものは我のみとす。人も亦許すに、蕉門の忠臣、一方の大將軍なるを以てす。また兼て畫道の妙手たり。

其『旅の賦』の一篇五段は、文簡なりと雖も、巧に封建時代、東西南北に羇旅するの狀況を寫し出して、文字頗る妙、文章に志あるの徒、必ずや一讀すべし。

○旅の賦　并引

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは、皆俳諧の情なり。我翁、白川の田植歌を聞初、奥羽の間をめぐり、兵共が夢を驚かし、あつみ山の夕涼には、吹浦を詠め、佐渡に横たふ天の川に、初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて、七百三十餘程を吟ず。曾良が落髪の力

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

量を感じて、一鉢の飯を分けて、風流を盡さる。ひと日芭蕉庵を叩き、繪の雑談に、予は旅十躰の繪をかゝせて、讃して、何某が求めに應ず、其風雅にたより、俗語をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ、奥の細道草枕の類にはあらず。

この引の、初半は、芭蕉翁が、旅情に風雅ありとしたる旨を述べたるものにして、即ち『奥の細道』の梗概を叙せり。蕉翁は元祿二年三月廿七日、僧曾良一人を伴として、都を出で、奥羽、北陸を經て、九月六日、伊勢二見が浦に赴きたる迄七百三十里程、吟行の興を盡せり。

(旅は風雅の花、風雅は過客の魂)とは、これ『細道』の冒頭の『月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり云々』に胚胎す。

(白川の田植歌) 同紀行、白川の關にて、

白川の關いかに越えつるやと問ふ、長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懐舊に腸を斷ちてはかゞしう思ひめぐらさず

　風流の初めや奥の田植歌　とあり。

(兵共が夢を驚かし)奥州高舘に、藤原秀衡父子の魂を吊して、

扨も義臣すぐつて、此城にこもり、功名一時の叢となる、國破れて山河あり、城春にして、草靑みたりと笠打敷きて時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

　夏草や兵共の夢の跡　とあり。

(あつみ山の夕涼には吹浦を詠め) 蕉翁羽後酒田にて

　あつみ山や吹浦かけて夕涼　の句あり。

(佐渡に横たふ天の川) 越中の國一ふりの關にて、

　荒海や佐渡に横たふ天の川　の句あり。

此賦は旅十躰の讃詞たるを此引によりて知らる。段落を、五に分つ。自ら讃し、自ら文す。文もまた讃なるなからんや。

旅店のさま、上段に書院床、劔菱のすかし、火の無き火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶、かたぶけて居たり。底に小砂の觸るは、夜べの殘りもいぶかし。出女のたて縞は春秋をしらず。根太板敷は落て、隅々まで、疊とゞかず。天井襖は、雨もりにきはづき、鐵行灯は、暗く、紙はわらんべの心といふ事に燃えたり。錢賣、草鞋賣にせがまれ、やうやうに枕をかたぶけ、心よき寐入ばなは、馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜のあけて、ふためくも、つらにくし。

　大名の寐間にもねたる寒さ哉

海道、旅店の夜景、俳人如きやからの、はかなき宿に苦吟する狀なり。末の一句、草枕旅は、誰しも悲しきものなるの情を盡す。これを一段とす。(劔菱のすかし) 劔菱形に格子目を組んだ、窓のすかしなり。(出女のたて縞は春秋を知らず) 飯盛女の老若共に派手な立縞の衣服を着たる事なるべし。〇(紙はわらんべの心といふ事に燃えたり) 鐵行灯の紙の、童兒が悪戯の爲に、處々燃やされたるなり。線香などをいぢりて、燒穴をつくれるもの。〇(錢賣)穴錢を擕へて、兩替をする者。〇(馬さし)馬士なるべし。

道づれの上をいはゞ、船頭の胸づくしをとり、駕籠廻しを叩き、馬さしとつかみ合ひ、一僕の後にさがるをねめまはし、鷄のなかぬに、つれの男を起し、提灯ともして夜道を行を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

手柄とし、入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〳〵といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も此情にかなへり。

第二段なり。此處、好ましからぬ道づれ人の上を云ふ。一句其旨を明かにす。

海道の寶物に、餅酒の無き所もなし。磨針峠の餅をくはねば、未來閻王の前にてからき目を見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは、逢坂の茶屋、饅頭のほら〳〵と見えたるは、見付の臺なり。卵子の黄ぬきは、木曾の旅、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。蒟蒻の田樂は、何ものゝ喰ひけるぞ。

第三段。旅道の寶物の特に目に立つものを擧ぐ。

乘かけに春の密柑やうつの山

○(錢の看板は筒をかけたり)木曾にて、街道家はづれに、竹の端に鼻紙をはさみ、傍に何文と記して、竹筒を置き、買ふ人に、代價を投げ入れしむるなり。

大川の上、馬駕籠の情、しば〳〵かぞへがたし。五月の大水もかし借の手形に出入、おのが草の戸は流れど、首だけの借錢を納して、しばらく息をつぐものは、島田金谷の俗なり。

水の淺深を何文づゝとたてたるは大きなる酒落なり。天龍の中の瀬は、馬人足を空にまどふ。乘人は股だけ入て、荷を肩にかけて待、あがるものは、負れ支度して、舟端に立。旦那が鎗をかたげたるは、渡し場の情なり。馬士駕籠舁は、輕重に日月を送り、一盃の酒に浩然の氣をやしなふ。一生を漂々瓢々とすまして、雲介の號を號り、炎暑の日も、甚冬のあしたも、榎の木の下に眠て、蟻の都に到。終に飲食を座敷につかず。汁かけて出す、馬士の食と作られ、小便は走りながら、吸売は手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名殘も暮て、世にある人々の尋く月日を、出替の季と定めけるは、世をやすく送る人にも似たり。

出女の出かはり顔や年の暮

道中、舟に乘りて海を渡り、雲介に召はれて水を渡る際の光景を記し來り、雲介の一生の漂々乎たる、出女の出替りの輕々たるを叙ぶ。第四段。

(五月の大水云々)は川渡の雲介共、大水となれば渡錢を高く取ると故、それを儲時として、借金の抵當に入れるなり。家は流れても、首だけつかる水ならなくに借錢の淵は、免るゝとを得るなり。島田、金谷は、大井川の兩岸に在れば、川に大水出でゝ、旅人難義せんとを希望とすなり。○(榎の木)街道の並木中、木古く、蔭多きは、今日にても榎なり。○(蟻の都)夢に華胥の國に往かずして、蟻の穴の都へゆく。○(一年の名殘)以下は出女の事に及ぶ。

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしは多けれ。獨坊主には、宿をかしかね、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霙の夕暮に、情ふかきあるじは、長持くさき布子かして、ぬれたる物を焼火にあぶる。あるは三寶荒神といふ物にしがみ付て、しばらく足を休れど、極めの札場より追おろされて、却てのらぬ前より股をすくめ、兩方の手に杖を携へて、あゆむべしとも見えず。人間病死の到來は、時も所もまたず、醫療のたすけうとく、懷中のふり藥は、やう〱急病を防ぐ。巡札飛脚の旅は、路頭に倒れ臥、片目なる肝煎に追たてられ、老僧の愍に門下に入、おとろへかさなり、終に黄泉の下に赴く。かねて何國の土とならん、終をしらず。犬走の土中にこめて、年の齢、衣類の摸様を小札にしるされて、何國のいかなる人と、いふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に、經文をよみて、同行の別を惜み、隅田川の念佛を尋て、我子の古墳にのぼる。今來古往の人、旅懷の情を盡して、風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて、二たび、みちのくにおもむき、不二都鳥の二句を求めて、すみやかに、故郷に歸る者は、貞室老人なり。東海道の一すぢも知らぬ人の風雅はおぼつかなしといはれし、翁の聲、耳の底にとゞまる。

第五段。西東、旅にさすらひ、半生を送る人の心細さ、旅路に犬死する人の悲しさなど叙し來りて、而して、旅は風雅を探ろの第一要道なりと喝破し、芭蕉翁、平生の語を錄して、全篇を結ぶ。

(片目なる肝煎)、海道宿驛の取締なり。片目とは、殘忍酷薄者の相貌をいはんが爲の形容。○(犬走の土中)未詳。犬が走り騷ぎ、墓場といふにても無き土中の事乎。○(岡部の辻堂云々)の故事未考。○(隅田川の念佛云々)梅若塚の故事なり。塚は、隅田堤上木母寺畔に在り。○能因の歌は

都をば、霞と共にたちしかど
秋風ぞ吹く白川の關

○貞室は、松永貞德門の出藍、芭蕉前の俳仙。不二都鳥の二句とは、

いざれのぼれ嵯峨の鮎喰ひに都鳥
跡の月みよしのゝ雲や富士の雪

なり。これに『これは〱とばかり、花の吉野山』を加へて、三句は、貞室得意の吟、嘗て自から、餘稿を灰燼となして、僅に此等を存せしとあり。

いさましの老木櫻や翌の日に
倒るゝまでも花はさきぬる
一茶

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜録

江聲山色

勿來近海

白水郎

吹く風の勿來關外、磐城山系遠く彼方に迎へ、短山低陵緩く海上に走る。眼界忽ち濶ぐ處、蒼洋碧巒、村舍點々離落し、人は煙霞に沒す。景致窈窕として、可憐彼女の如し。嗚呼平潟之灣、勿來關、猶ほ我風景史の綠兒なり。君よ予を以て新風景に媚ぶるものとなさずんば、鎌倉に大磯に復た徒らに俗者の糟粕を追はず、去て此地に其畫題を捉り來れ。

馬陵城下

舊相馬領。僅かに六万石の一小藩。海に濱し山に倚り、比較的地開け民富む。馬陵城下茲に別天地を成せり。然れども山に奇僑の態なく、海亦遠淺にして、巨舶遠航の壯志長しへに絕ゆ。加ふるに無爲の史跡、平凡の地勢と習風化を成し、民俗自ら重厚單純なるも、冒險侵略の氣象なし。然りその重厚は北人半面の代表なり。その單情は宗敎の靈化を直受する唯一の性格なり。憂ふる勿れ、齊一變せば魯に至らんのみ。城東一里松川浦（歌浦）あり。規模稍小なるも景趣寧ろ愛すべし。姻川子此地を以て、金澤八景系統の風景となす。當れる歟。城南五里石神村あり。二宮先生捿居の屋存す。室は富田高慶翁報德記を編せし所なりといふ。

安達太郎山

常磐線、阿武隈下流域に於て青森線に合す。之より一轉其流域に溯りて、南白河に向ふ。此の間地相又一變、正に山國の觀を極む。之れ中央山脈の任意縱横して、山容の跌宕豪壯なるに依る。而して其觀望吾安達太郎山を以て宗となす。彼や巨容鬱變、將に逼り來りて人爲に畏怖せんとす。哀れ山國的の巨材其れ茲に俟つべきかな。今時東北地方漸く政治宗敎上の戰野たらんとするに當り、一片御用の輕調もて、山國の民心を惹かむと試むるものあらば、其淺愚寧ろ憐むべし。岳麓の二本松城は、安部井磐根翁淸臥の處、其梅花書屋は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人をして轉た暗香を忍ばしむ。

猪苗代湖畔

岩越線に賴りて中央山脈を紆曲攀登し、了れは則ち猪苗代湖畔なり。湖水は磐梯山脚に湛えたる火口湖なり。水色淸明にして山氣滂薄す。湖水北に決して、日橋溪となる、潺々湲々林を縫ひ石を穿ちて、遠く仙寰に逝る。氣象又多變、倏にして雨顰、忽にして霽笑、人已に稱して日本のゼネワ湖となせり。公等若し夫れ奥羽の地勢に見る處あらば、所謂耶佛對抗の爭鬪費を擧げて、何ぞ此土に湖畔學校を計畫せざる。

鬼面百相（其五）

青柳有美

（前號なる「藤村の詩」は「鬼面百相」の（其四）なり）

▼友あり、狂生を詠んで曰く『この人や突然醉ふて花に嘔吐き』と。蓋し當れるものか。

▼人生を輕んずるに到らずは、眞に人生を解するは難し。

▼外界のリズムと人心のリズムとが、相共鳴せる瞬間は、即ちこれ『美』なり。

▼不具者は、人之を憐み、好んで之を收容し、喜んで之を養ふ。白痴院あり、顚狂院あり、養老院あり。然るに、人の、惡人を責め之を惡むは、何故ぞや。不具者は、人類の重荷にして、人種發達の障害なり。乞ふ生育する勿れ。之を捕へて鞭うたば如何に。之を責めて死刑に處せば如何に。今の道德屋はかゝる無慈悲の議論屋なるを。

▼猶太敎の思想は、唯一神敎なりと稱すれども、實は、古きペルシヤの宗敎などの如く、雙神敎とも見るべきものならずや。即ち、創造恩惠の神と、破壞暗黑の神とあり。前のものは、是れエホバにして、後の者は、是れサタンと稱ふる惡魔なり。

▼ソクラテスは、今の所謂哲學者といはんよりは、寧ろ希伯來風の預言者なり。不幸にして後世の學者に捉へられ、所謂『哲學者』の名をなせるこそ、千古の恨事なれ。イザヤが偶像排擊の如き(以賽亞書第四十四章十四節以下)は、却て純然たる希臘風の哲學論なり。之を哲學者と稱ばざるも、又遺憾なれ。

▼人間思想の進歩は、其言語辯舌或は其作る文章の發達進歩と相伴ふものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

▼外國人の優力に懼れて、雜居尙早きを唱へ、日本人種の弱劣を認めながら、この邦を世界第一の如く、誇り叫ぶ人の矛盾さよ。

▼詩の始めは、原人の感激狂舞に起る。狂はずして人よく詩を作るといはゞ、是れ僞なり。げに狂者に非ずんば、詩人たる能はず。

▼人は、何物にても、到底その What is?（何なりや）を知る能はず、たゞ其 How is?（如何なりや）を窺ふのみ。故に覺るところは、其質躰に非ずして發作と屬性とのみ。

▼淸敎徒なるミルトンは、煙草を吸へり。

▼顏の丸く、躰軀の太く肥えたる女などは、須く細き縱棒縞の衣類を着るべし。必すや、身の丈け高く見えん。垂直線によりて、觀るもの、その上下を連想すればなり。又ひよろ長く痩せこけて、顏のむげに細りたる向は、須く横縞を着るべし。幅廣く太りて見えん。これ左右を連想せしむればなり。

▼日本歌の妙は、枕詞にあり。

▼少しく、智慧ある女人共は、過ぎし佛蘭西革命の其時の如く、男子をして、悉く己れを拜ましめんとす。

▼男子の眞心より出でたる戀愛は、頗る混りなきものなれど、女子の戀愛は、如何に純なるものといふも、稍々之れに功名の心を交ゆ。男子には此る言葉なきに、女子の好んで『見末のない男』と口癖にするも之がためなり。少しにても、智慧ありと思ふ婦の戀は、殊に甚しく、功名心七分にして正味の戀愛は唯其三分のみ。之を彼等が所謂純戀愛とす。面白きとならずや

▼宗敎上の崇拜は、美術上の歎美と、人性本來の恐怖心とが、相混和して成れるものか。

▼日本男子の流行は、凡て婦人流行の跡を追ふが如し。婦人小き縮珍の煙草入と纎やかなる細手の烟管とを用ふれば、男子また學んで之を用ひ。婦人紫空色の蝙蝠傘を翳せば、男子又之れに習ふ。平安朝の末世には、公卿の齒を染め、白粉をほどこし、黛することさへ、又流行れりといふに非ずや。

▼神功皇后は、頗る天照大神に似たり。

▼日本の三大女傑は、神功と袈沙と紫式部となり。

▼ヘンリー、チョルヂの單稅主義は、その立論の根底に於て、リカルドの賃金元資說を信ずるに似たり。

▼平均せんとするは、物質の通性なり。されはにや、自ら墮

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

落せる人は、餘人の德高きを見て快からず、之を墮落して己れに平均せしめずんば、止まず。自ら處するところ高き人も、また同じ。人を揚げて、己れの如く高貴ならしめんことを希ふ。これ、善玉と惡玉の別るゝ所因なり。

▼平將門、藤原純友などの徒儕は、藤原宗家一族の榮華と國司郡司などの暴政無道に反激して起れる、當年社會黨の首領とも見るを得ん。

▼骨片を取りて、酸類のうちに浸し置くこと多時なれば、鑛物質のもの、全くそのうちに解けて、たゞ膠質なる有機質のみを殘す如く、故人の欠點は、悉く『時間』の酸類中に溶けて、たゞ其人の長所善美のみを、友の記憶に印するが如し。されど、なほ一の考ふべきあり。その人もし惡きこと多くして、善を有すること少からば、その善は消えて、その惡きところのみ、後世に傳はるべく、その人若し惡に勝りて善を持つこと多からば、その惡は『時間』のうちに消えて、善のみを後世に殘すに似たり。それ錄して『持てるものは與へられ、持たぬものは、其持てるものをも取らるゝなり』とあるに適はせん爲なり。

▼人は、物忘れするとて、呟けども、『忘却』ほど難有き福音は、神の賜物のうち、多くあるまじ。戀に破れたる痛苦もし長久に相續かば、如何にぞや。親に別れ子を失へる歎き若し何時までも絕ゆるとなくば、人の子の苦みは如何なるらむ。生れしより以來、相見相接せると、悉く記憶に殘りて忘れられずば、吾れ人の頭腦は狂亂せん、よろづ忘れらるゝこそ、惠みなれ。

▼不思議にも、優れたる人々は、よく同級同門のうちなどにあるものにて、之も時世の大人を生む證などになるべき乎。ロングフエローの、ボードウヰン大學にて、ホーソルンと同級たり、周文と雪舟とが共に相國寺畔なる如雪の門に出で、かのボシユエ (Bossuet) が、リシエリユーまたヘンリー四世などと共に、ナウアルの大學に學生たりしが如き、其例なり。

▼人は、大事を企てゝ停滯蹉跌せんよりは、小事に於てなりとも、進步成効せんことを希ふ。

▼人に書信を送る時は、すべて大切なる用件を、其『追白』中に、一寸書き添ふるを智惠ある手段なりとす。又人の、謝絕せざらんことを欲する如き願ひ事は、なるべく、手紙の終末に近き中程に書くを以て妙とす、借金の申込など、殊に然り。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

▼少く、世の波に曝されたる婦人は、大低、ちとばかりの事には驚かぬほどの怪しき度胸ありて、妙にズゥ〳〵しく、大洋の海面の如き趣あるものなり。これ正直勝ちの男子などが、到底及び難きところなれど、婦人の毒婦となり得るは、この要素あるに因るぞ、うたてき。

▼世に恐ろしきものあり。其數四つ。健康と色情と自惚と宗敎心とはそれなり。

▼奈良の大佛と稱ふる盧舍那佛の銅像は、その高サ五丈三尺なり。何を標準に、特に五丈三尺と定めしにや。恐らく、一般人の身長を十倍せるものなるべし。然らば、奈良朝時代の人々の身の丈けも、矢張り今の世の如く、小なりにて、平均は五尺三寸位なりしと見えたり。

▼伊藤博文侯といふは、世間の批難さへ餘り激しからずば、過ぎし藤原家の卿たちの如く、我が女を、女御に進めまいらせたきほどの人なるべし。

▼自說を駁論せらるれば、その果して謬れるや否やを究めずして、直に先づ身搆え、必ず我が說を辯護せんとあせると、人の通性なり。誠に噴飯に堪えざることならずや。

▼多くの人は、我身に臍のあるを忘る。

▼女性は、男子に飜弄せられんことを欲す。然らずば、男子を飜弄せんと勉むるものなり。

▼佛蘭西語にて、羊牧と戀人とは、數々同じ文字なることあり。berger を以て彰さる。妙味甘し。

▼リシエリユーは、それ道鏡乎。

▼人獨居すれば、淸麗なり。人に妨げ穢されざればなり。また醜穢なり。人を憚らざればなり。

▼今時の婦の犧牲獻身ほど、怪しきはなし。一見するところ『己れ』をすてゝ、我が愛するものに捧げたる如くなれど、實は、決して〳〵然らず。其犧牲にせると見せかけしは、唯『己れ』の皮層のみにして僅に衣食住の自由など、物質につける快樂の一部(全くとはいはじ)に過ぎず。奥まりたるところに『己れ』は、依然として昔の如く、これあり。此の如く、『犧牲獻身』の美はしき名の下に、僅かのものをだしにして、男子の鈍眼をくらまし、男子をして其持てる總てのものを犧牲にし、之を燔祭の供物として、我が情感に拜跪奉侍せしめ、以て自ら飽かんとはするなり。その『犧牲獻身』の香こそ、たゞ『己れ』を拜ま

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

しめんとするのまじないなれ。去ど、女性とて、一寸八分の金觀音ならねば、參詣信心の善男、金龍山程には、多かるまじ。

▼地力遞減法の、大腦に行はるゝは、既に之を言へり。熱學によるに、水の熱せらるゝや、之に熱を加ふること多ければ、沸騰點までは、隨つて熱度昇騰すべしと雖ども、その上如何に之を熱するも、たゞ氣躰に變ずる潛熱を宿すに止りて、少も寒暖計を昇らしむることなし。水蒸氣とて又同じ。是に至りて、地力遞減法は、大腦のみならず、又この所にも行はる。天地に二法なし。凡て一元一法なり。二法一元論なぞとは、何等の痴ぞ。

▼暗黑時代とは、歐洲文明の疲勞休息せる時代なり。（まだある）

近松女氣質

櫻井鷗村

（其五）かる〳〵三度嫁入て

未來を急ぐ二世の緣

霄庚申のお千代（上）

予既に、意外の夫婦の語ひに泣ける、近松が三女性を觀察し來りたれば、今、更に步を進めて、世話物中の一異彩たる、心中霄庚申のお千代を擧げんとす。

霄庚申は、近松が七十才の作にして、其世話物作に於ては、これを以て、最後とす。全躰よりいへば、必ずしも世話物中の上乘とは云ふべからざるも、其異彩なる所以は、夫婦が、浮世をはかなみて、情死の哀れなるに終るに在り。近松、これをものして、不幸なる結婚を悲しみ、悲慘なる離緣を憐むものの如く、憐愍の悲痛、凝つてお千代といへる、哀にいぢらしき女性となるか。

夫れ、男子は、良妻を得て、家道を立て、女子は良夫を得て、生命を安んず。良緣好婿は、女子生涯の最大事なり。もし之を得る能はざらんか、心鬱し、氣屈し、浮世を果なみて、半狂の態となり、活氣銷沈して、春は花、秋は月、それ何の樂みかあらんや。而も、既に嫁して、或は鈍夫に藕して破鏡の哀を來たし、或は契緣、久しからずして、孤衾の淋しさに悶ゆるとあらんか、佳人の長恨、綿々として盡る期なく、人交らひも面はゆく、爰に、純潔なる胸裡、裂疵を生じて、終生、治し難し。

霄庚申のお千代の如きは、實にこの怨恨悲歎を細にして、一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

死寧ろ碌々の殘生に優れりと觀ずるものなり。お千代生れて、豪農の家に、蝶よ花とかしづかれ、花開きては、野中の菫、才子の折るに任かせて、いかなる良配も得易かるべかりしに、戀しともいとしとも知らで、道修町の伏見屋太兵衛へ、親の目鏡にて嫁入させられしが、其男『心無性に身代を持ちくづし、たゞずみもない樣に成り果てゝあかぬ別れ』をなして、處狹き田舍には、彼女は、もう出戻りよと、善惡の見定めもせずに、口々に噂立てられ、扨てまた二度目には、嫁入つて間もなく、夫に死別れて、またもや里歸りつ、此に於て乎、お千代は、穴にも入りたき心地ならざるを得じ。然るに、八百屋半兵衛といふ、武士の成下りの義理かたく、俠氣あるものに見出されて、三度目の嫁入り、其時の狀は、姉なるものゝ口によりて傳へて曰く、

人は和女の辛抱が無い故に、去られた〳〵と批難つけ、此度の嫁入りも、追ひ出さるゝ間はあるまい。忘れても、島田平右衛門が、娘の風下に居るなど、娘持つた人々は、寄り合ひ茶呑み咄しにも和女の噂。ま一度戻つては、親兄弟、人中へ顏が出されぬとは、知りぬいて、火にいり、骨を碎かるゝとも歸るまい。オヽ、必ず去られて戻るなど、念に念をつがふた今度の嫁入、

と、哀れや、佳人、自ら罪無うして、世の酷薄なる批評譏謗の爲に、鬱狂半死の悲境に陷れられ、生を安んずるに處なくして、而して、半兵衛は、この薄命なる閲歷に、いたく同情を寄せ、其いぢらしさを愍みしとおぼしく、されば夫婦仲、睦ましく、爰に、お千代は、情愛の深き樂しさを味ひ初め、もし其儘にして、中を離つる叢雲なく、妬風なくんば、花や月や、世はいども樂しく、鬱狂閉塞の情懷は、胖に開展して、溫良平和の良婦として、我名に叶ふ、千代の緣の末長く、君は尉よ、我は姥まで、八百屋の店も、萬代の榮えを來たすべかりしに、悲しきかな、此度こそ、良夫を得たる果報はありながら、姑は嫁いびりの名代者、惡婆の根性恐ろしきに加へて、夫半兵衛も、義理ある養子の身、常々、お千代のいぢらしきを、陰になりて、庇へども、心の任ならず。この惡婆の爲に、朝な夕なに、何事につけても、責めさいなまれ、されば、良夫に逢ひて、春の霜に咲き損ねたる蕾の折角に開かんとせしも、開き兼て、此上ながら、またもや離緣の悲痛に

逢はんとし、火に入り骨を砕かるゝまで、歸らじと、兼て誓ひし嫁入の、間もなく、里へ追ひ戻されて、それ見たことかと、村人に嘲けらるゝつらさは、何日なるべきと、待つ心地にて、日を暮しつゝ、されど、夫、家に在りなば、兎も角も一日を永くうすべきも、たま〳〵永の留守の其間にとう〳〵姑去りと稱して、籠に乘せられて、いや應なしに、親里へ歸されたる時のそのつらさ、お千代の胸中、果た幾許の痛楚を感ぜしならん。

　恥しやまた去られて、

と姉に訴ふるは、一句、血に鳴く、悲慘痛絕の聲なり。姉にまた戻つたかと責らるゝ迄も無く、お千代や、此度の離緣は、死してなほ耻ぢを拭ひ難きの苦痛なるべきを、こと〳〵しく、意見せられて、何とたまるべき、腸は九廻して、寸斷の思なき能はず、其耻かしやとは、即ち世上人情の酷薄にして、寬假するヿなきの無情を悲しむ所以にして、此際焉んぞ、自己の名譽を思ふの遑あらんや。而も、夫とは二年の馴染、何の不和不平なく、剩さへ子さへ宿したる仲にて、姑の苛虐なるは、更に夫婦の情愛を濃厚綿密ならしめ、如何に痛苦の難義に逢ふとても、この樂に慰められて、八百屋の家は、死んでも出まじと思へるものを、飽かぬ事に引き分けられては、爲に情緒錯亂せざらんや。

加ふるに、戻るまじき家に戻されて見れば、父は限りと見ゆる大病の床に苦吟するあり。姉は情實を知りて、妹を不愍と思ひ、父には今は知らさじと隱さんとすれば、はや、噂は村中に傳はりて、折柄村の者、見舞に來れば、いぢらしやお千代はちやッと姉の陰、見付けられじと身を隱せば、ア、隱れまい〳〵、只今堤の茶屋で、大阪へ戻り駕籠の咄で聞いた、お千代殿、目出度い、去られて戻らしやッたげな。と、面前に罵り聲高く、おれが貰つてやらうかなどゝ、冷かされては、お千代、切なき心に、親兄弟、我身の耻を悲しんで、世の無情冷酷を、いかばかり歎きけむ。(未完)

◎岡山孤兒院の名既に世人に聞ゆるヿ久し、然れども、都人士の實地に其の燈寫を見て、悲慨今更の如くなるヿ、今回を以て初めとす。願くは天下の同情愈よ優渥にして、此の大なる慈善器關をして圓滑完全に運轉せしめよ。

隨感

○花ならぬ華

咲きそろふ紅白の姿をのみ花と誰が言ひそめけん、艶麗にして燦びやかなるを賞でて、新緑、流枝の趣むきあるを忘れ、偏へに装ほひの美くしきに迷せんとすると淺しけれ。朝夙く露にぬるるみどりの葉を惜み、夕晩く風に梳づる細糸の枝に觸れて、他の開花落葩にあくがるるたはれ男に伴はず。扨てもなまじひに、世の人々の嗜好と違へば、もろともに騒々しく花見んとを希はず。長閑けき春の日にたれこめて空しく案じ、雨ふる寂寥き野邊に悄然として孤りそゞろありきする時、吾心を讀む人の元より少なきとは知り乍ら、さすがにはた心細くして胸に涙の浮ぶとあり。世上茫々草多し、天下幾百の風雅の人もありなんに、遺りなく我と心を一にして、違ひなき親しき默契を交はさん友のあれや。春雨、糸より細く、吾と同にさめ〴〵と泣き、草檐、憂に似て重く、滴々として涙を落す。故人、還りがたく、佳人、來りがたし。幾度か念頭を撫して、思情を慰さめ、徒らにながめくらして、齢ひの益々加ふるを知らず。

○天下人世のひろさ

其の徴なるとを言はば究まりなく、其の雜れるとを言はば限りなきにも關はらず、世は亦た存外に狹まく、思の外に單調子のものかな。歳々年々、新たらしきとなく、人々戸々、驚ろくべきともなし。大觀は悟を與ふれども亦た樂しみを減じ、迷ひは苦しみを寄すれども、亦た面白きともあり、痴態千百の空想に眩惑して、世になき妄念の世を形造り、麗かなる天地を夢に見て、吾ひとり千々に狂舞せし頃ほひの床しからずや。山に蕨を取り、磯に貝ひろひし折の空は、今よりも廣く高く且つ青き樣にてありき。初めて奇しき心に打れて我乍ら異様の感激せし頃の花は、今よりも艶なりき。功名は、競ひを生じ、競ひは世を大きくせしに、今はた其の面積もなし。歴史と新聞紙と接續し、古人と今人と種を一つにするとを知りそめて、世の味はひの過半は失せたり。抑そも進

歩か、はた老衰か、有志審らかに考へずんばある可らず。

○自から安んぜざるの怯

倫理、世界觀などの疑は暫らく措き、世に在りて心に安からぬ事を成し、滿腹に確信を得ず、念頭に疑懼の物思ひあらんほど、卑しきはなし。天、言はずして大事を爲し、勢、屈せずして終に道を遂ぐ。人間必らずしも世界の爲めに其の微力を獻げざる可らずと言はねど、人や彼自身に於て善を爲さずして何の安きかある。疑ふものよ、巍然として獨立せる彼の大丈夫を見、淑然として貞正、限りなき佳人を見、以て自から省りみて自から比較すべし。露命短かきが故に果敢なしとのみ言ふと莫れ、果敢なきが故に善を爲さざれは禁へざるにあらずや。たとひ汝二三の善行を爲すとも之に誇る勿れ、誇るべき價値なければ也。抑そも安くんぞ之を他の爲めにせん、只だ己むとを得ざるの故のみ。古人之を至誠と謂ふ。

○何事にても成さんとの自信

よし人の力は微かなりとも、一旦、感激熱振せば、如何なる

事にても成就せしむべしとの自信なき輩は、百万の味方を得るとも心に臆する所あるなるべし。古し千万人と雖ども我行んと言ひしは、千万人にも勝ち得て餘りありとの確信にして、之に恥ぢざる由を言へる消極の主張にはあらず。夫れ基督、十字架上に刑せられて、天下一人の知己なき時、斷乎として曰く、吾世に勝てりと。不肖吾黨の如きものと雖ども、亦た玆に學德するとを得なん歟。凡そ、人其一心を凝らし、一義に熱し、一命を獻ぜんに、天下何事の成らざるとある乎。此の信を得たるは、天下贊同の空しき聲に優れり。

○蠻勇

餓えたるもの食を擇ばざる如く、勇なき時節に蠻勇を快とするは、半ば人の本念の要求を見し、半ば人の當代の弱點を現はす。悲しひ哉、時人確信なく、僞善、懷疑に彷徨して、斷然として立ず、暫らく蠻勇を容赦して其の横行するに任せんとするは何事ぞ。酒の醉の元氣にあらざる如く、純正ならずと自覺せし勇氣は、寧しろ一種の臆病なり。如今決して斯の如き流行を寛假す可らず。

寄書

暮れ行く春の哀を思ふ

知津子

細柳陰益々濃く清波調へ急調にして煦々たる陽春漸く將に暮れなんとす獨り杖を曳いて西郊に晩歩すれば巍乎たる叡山峯然たる宕嶽翠黛を粧ひて紅霞の間に隱見し青草黄花紛然錦繡を織り成して我エルサレムを飾れり。

嗚呼煦々たる陽春漸く將に暮れなんとす微風の樹梢に戰くなけれども車返しの櫻花と靜心なく散り行きて御溝の波に泛ひ成蹊の觀堵牆を囲すに先ちて籬邊の殘桃葉に已に踈亂たりあゝ幽徑の菫花よ汝何ぞ然く心落居すして其可憐なる姿を隱せるや蝴蝶の戯を厭ひてか流泉の曲に誘れたるか嗚呼鶯啼の哀へたること又何ぞ然く甚たしきや汝は陽春の寵兒にあらずや曉窓の少婦枝を停めて汝の諧調を悦しこと如何計ぞやたとひ百花は梢を離れて其行方に迷ふとも汝の翠尙ほ嬌かならば暮れ行春も毅然として其足を留めざらんや嗚呼血啼の新客何か故に然く匆卒として來れるや含羞の海棠花汝の絶叫に驚いて思ひ亂れしこと已に度重れり、

嗚呼煦々たる陽春漸く將に行かんとす青苔に座して靜に其哀を觀すれば悵然として心痛み泫然として涙把に滿つ嗚呼陽春何が爲に來れるや我始めて汝の姿をかいまみしは冬の名殘尙ほ巣竹の陰に消えやらず軒端の梅値に二三輪の笑を傾けし頃なりきされども我心は一日も安き事なく厚氷の絹ときて垣根に急く遣水の調に伴宵の枕を欹て若菜つむ乙女の影もかすめる野邊にいでてはひたすら詩想に打沈みぬ

まして佐保姫の姿日日に其美妙を加へ繽紛の情緒滿る青麥の穗に出て網繆の思ひたんぽゝの色に忍ばるゝに及んでをや我れ我日夜の勤を欠きて頻に稚子櫻の無邪氣なるをめで傾く日陰を惜みて只管告天子の微言を樂めり、

然るに流水忽ち波色を改めて渡頭の孤舟騷人の跡を絶つに方てや未た離愁を解せざるの騷人は新柳を手折りて愁眉を帆前に學べとも眞葛ヶ原の詩僧は悄然若葉の陰に佇みて其望月の欠け易きを嘆ちぬ

嗚呼煦々たる陽春何ぞ其來ること然く樂くして其去ること然く哀れ深きや双ヶ岡の哲人空しく幾代の後を契り白髮の將軍徒に關路の哀を詠めり是れ將た汝の心の變り易きか故か抑もまた自然の母汝を強いて遊子の情を顧みざるが爲か翩々たる双蝶の殘紅を尋ねて飛び謝貢へる賤か女の遺芳を挾みて家路に急げるを見れば皆これ惜別の悲にあらざるはなき也あゝ煦々たる陽春忽然として來り忽然として又逝かんとす何ぞ其れ然るや

されども遠山暫こふて白帆原頭に沒するの際無限の愛を示して江畔に依々たる其姿を望めばあはれ彼女もまた冲々として洛陽の天を去るに忍ひざるに似たり

嗚呼煦々たる陽春今や將に暮れなんとす多感の志士豈に久しく其哀れを凝視するに堪へんや噫

浮世の光

藤原母村

ゆら々と流るゝ川の水面に　寫りし人の影見れば
非情の愁ほの見えて　花なき草のさまなれや
春一時の夢さめて　うつゝうたかた暗深き
塵の此の世に星のごと　光りを求む人ならむ
露の眼に大空を　あをいで心たゆたいつ
我世に光りなからめや　希望の門の青細し
綠の草の香ににほふ　岸邊に立てる影二人
星の涙の白露を　彩る筆は愛の色
み空を見れば星幾つ　こゝを瞻めて瀬光り
幽の聲にさゝやきぬ　一人の影は誰ならむ

◎新刊書籍及雜誌新聞の批評は余白なきに付次號に讓る

時事

女學論の爭

鷗村

福澤翁が女大學評論に於て、貝原益軒を朽壤より引き起して、徹頭徹尾、其所論を打擊し始めたるを序幕として、近頃の新聞紙界は、女學論の一戰場となりたるやの觀あり、其消息は既に前號に於て報告したる如くなるが、其後に至りて、いよ〳〵論爭の本舞臺に入りたるの狀あることにて、今、敵味方の論點を擧げん。予も亦、鋒をすごいて、少しく福翁に敵せん。

前々號の本誌にて、貝原益軒は當時の女權擴張論者なるを云ひたるが、これと同樣に說をなすものは、報知新聞の田川生なり、其四月廿三日の紙上に、女大學評論につきて、『福澤翁に寄す』の論にて、

夫れ女子は成長して他人の家に行き舅姑に仕ふる者なれば、男子よりも親の敎へ緩にすべからず……是皆女子の敎なき故なり

古語に曰く人よく百万錢を出して女子を嫁せしむることを知つて一万錢を出して子を敎ふることを知らずといへり

等、女大學中の金科玉條を引きて、

彼が女大學を著はせる所以の本旨、畢竟するに女敎振作の爲なるや疑ふべからざるなり。蓋し此時に當て男兒の修身に關する著述少からず、大學あり、中庸あり、小學あり、實語敎あり、今川あり、其他其類頗る多し、而して女に關する著述は未だ顯れず、是益軒の慨然憤を發して女大學を著する所以なり。

といひ、また福翁が、女大學の獨り、女子のみ責むるは不可なりといへるに反して、田川生は、此書の性質として然るべき筈なり。西洋の女訓書とても、單に女子をのみ相手にして正しからんことを求む而も益軒には他に大和俗訓、初學訓、童子訓、君子訓等の著ありて、女子を取締ると共に、男子を取締まらんと苦心したるの跡歷々として見るべきとて、其證言をさへ擧げたり。

此論に反對して、翌廿四日の時事新報は、社說欄內に『女大學の流毒』と題して、依然、『女大學評論』に於けるが如くに、益軒を誹りて、封建鎖國時代の古人物、頑僻固陋の徒となし、

蓋し著書は漢文の經書の一般に解し易からざるを以て、之を解釋して平易の文字に認め、以て世間の婦女子に讀ましむるの便に供したるとならん、其時代に於て其說あるは、固より怪しむに足らず、我輩に於ては敢て其人を咎めざるのみならず、古流學者の一人として、確に之を認むるものなれども、著者が古主義を敷衍し、其文を平易にして、一般の通讀に便ならしめたるの効能果して空しからず、其書の流行と共に、ます〳〵其主義を傳播せしめて永く儒敎の毒を流したるは女大學の著述與つて大に力あり。………試みに日本社會の實際を見れば、男子の放縱、女子の慘狀は今尙ほ昔に變らざるのみか、寧ろ甚だしきを加へたるの觀なきに非ずや即ち女大學の主義は現に其害毒を逞うしつゝあるものと云ふ可し。

とて、如斯きは內地雜居後の社會に於て忍ぶべからざる事なり、また人權の重んずべきものは、名譽、生命財產にして、就中名譽は最も大切なり。人性に男女の別はあれども、名譽に輕重の別あるべからず、日本社會にては、婦人の名譽は恰も男子の爲めに蹂躙せられながら、世間に之を怪しむものなき所以、女大學の害毒與つて力ありなどと、或は一夫多妻を難じ、日本婦人社會の慘狀たる狀態を概叙し、而して

女大學の如き法律の如き規定と根抵の主義を異にして、寧ろ道法の行爲を敎唆するの著書が、尙ほ世間の一部分に珍重せられて古主義の餘毒を吐きつゝあるは、經世の眼より見て、斷じて許すべきに非ず。女大學を始めとして、凡て此種類の著書は政府に於て須らく其發行を禁止すべきものなりと。

の過激至極の斷論をなして、恰も、權利義務といふとの外には、胸中一物なき法學書生の議論に似て、時事新報如き、老成者の爲に、甚だ採らざるものなり。

即ち於此乎、國民新聞の『東京便り』にて、德富蘇峰氏は此說を駁して曰く、

◎頃ろ女子に關する論者中には、貝原益軒の女大學を攻擊し、攻擊して尙ほ慊らす、發賣禁止を勸告するもの有之候。記者の如きは。貝原翁其人の女大學には、甚だ不服なるも、之れが發賣を禁止せればならぬ程、古人の書を迫害するの必

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

要を感じ不申候。人各々思ふ所あり、如何に己と所見を異にすればとて、古人の言論の自由迄束縛せればならぬとは、少し本氣の沙汰とは、思はれず候。

◎且つ貝原翁の女大學は、元來婦人を相手として立論したる書物なれば、婦人のみ責めて、何故に男子を責めぬかと謂ふは、聊か議論の本位を取違へたるものと可申候。さりとて記者は七去抔と申す論に、毛頭同情は無之候。此れは儒教主義の根本的間違に候。併し人を咎むるにも、其の度合を外せば、却て世間は咎めらるゝ人に向て同情を表する樣に可相成候、記者は寧ろ報知新聞の意見、却て平允なるを覺へ候。

◎記者は貝原翁の婦人論には、反對なれども、貝原翁其人には、之を攻擊する人よりも、寧ろ多くの尊敬と欽慕とを獻ずるを遲疑せざるものに候。彼が一生は樂天的の福音を行ひ、且つ語りたるものにして、其の一生涯は恰も樂天的節制主義の說教と可申候。尙ほ他日或は翁に付て語る可く候。

と。一体福澤翁の女學論たるや、あまりに西洋の外形に心醉して、日本を化して表面丈にても、西洋と同一ならしめんとするの志想よりして、頗る急激に馳せて、却て、眞に志ある徒の容るゝ能はざるに似たり。其女學論發表の次第と記する處によれば、翁の說たる、三四十年の、熟考の餘に成りたるものと云ふを以てすれば、其論旨の、あまりに淺薄にして、一驚を喫せざる能はず、爲に翁の眞面目を疑はずんばあらず。

福翁の女學論は、かたわ娘及び、男女交際論以後、毫も進步せる處なきもの〻如く、其昔、明六社の先輩の一人が、男女同權論を唱へて、女子も男子同樣に、斷髮せしめて、結髮の壓制より脫せしむべしといへる議論と、今なほ其主旨を同じくするは、これ蓋し翁の本領に在りて存するものなりとすれば、あまりに淺薄なるものに非ずや。福翁に取りては、其女學論は、頗る得意とするもの〻如けれど、此度の女大學論にては、却て明治時代の一笑話柄たるの誹を免るゝ能はざらんか。それ他人の議論、殊に死人に口なきもの〻遺說は如何樣にも惡口誹議すべきも、扨て、自ら述作するに至つては、頗る難し。抑も、福翁は、評論を終へて後、果して、如何なる自家の新女大學を、世に示さんとはするか。翁一家の議論たるや、精神を棄てゝ、形體に馳するの狀あり、其儒敎の倫理を以

て、一概に頑僻固陋、一文錢を價ひせざる視する如きは、餘り西洋的物質文明に狂するの所以たらずんば能はず。されば、翁が多年熟慮の餘、晩年に及んで、この極端なる女大學評論を、世に出して、女子の權利を伸張して、日本女性の良友ならんとするの志は、頗る芳しと雖も、この議論の如きは、天下人をして、女權保護の道に發心せしむるの福音とならずして、却て、今日折角に、伸び來りたる、女學論の氣勢を一頓挫せしむるものとなるをなきか。世上心あるの人士は、時事新報紙上に、感謝讚美の語を寄するの類には非ざるべし。

扨て、福澤翁の女學論發表の第一動機は、男子の不道德を攻擊して、社會を改善に就かしめて以て、國威を伸張せんとするに在り、此事や頗る良し。男德の頹廢は、鼓を鳴して、之を攻めずんばあらず。されど、たゞ物質的文明の考として、男子征伐を講ずればとて、男德に於て、幾許の改善あるべきや。まして、女子の權利の伸張に、何程の補益あるべきか。

時事新報の、此頃福翁の旨を受けて、男子征伐を講ずる、勉めたりといふべし。或日は『男子征伐』と題して、不德なる男子は、婦人社會の公敵なり、然るに、眞に女道女教を振起するの目的ならんには、これ等の力を假るべからず、却て先づ、醜行男子の征伐より始むべきなりといひ、或は『無教育は男子に在り』とて、女子は無教育なれば、語るに足らずと稱する男子は、往々、極めて無教育なる藝娼妓の徒に狃れて、其翫弄する處となる。これぞ、女子の無教育なるよりも、男子の無教育なるを證せるものなりとし、また『洋學書生警しむべし』にて、口に西洋の新主義を唱ふれば、實際にも一夫多婦の醜行を棄て、女權を保護すべしといひ、また、『放蕩男子反省すべし』『殺人の例』等にて、男子放蕩の結果、病毒を受けて、これを無病の妻女に感染せしめて、あたら、其死を早くせしむるは、妻を殺すの所以にして、松平某に比して、毫も異る處なしといひ、或はまた、醜行刻薄男子の實例の投書を載するとなど、其主旨とする所、吾人は頗るこれを見て、同感同情の至に堪へざれども、これ亦時事新報一風の、急激なる說論に過ぎたるは、却て中を失するの謗を免るゝと能はず。日本社會に於ける婦人の不幸慘狀を見れば、其原因は、男子の不品行に外ならず。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

との断定の如き、あまりにも、云ひ過ぎたりといふべし。蘇峯氏が、また『東京便り』にて、

◎婦人の位地を進むるは、男子を征伐したりとて、出來不申候。婦人彼自身の教養なき限りは、如何に神棚に安置したりとて、婦人の位地が高まる筈は無之候。此れは平凡の議論なれども、眞理也。

といひ、人民記者が四月廿七、廿八日の『女子教育』に於て、日本女子の地位は、必ずしも、世人の說くが如くに、不幸慘憺なるものに非ず。勿論日本婦人の地位は、泰西婦人の地位に比して、頗る劣れり、されば

從つて、日本婦人の位地を高むべき必要を感ずることに於て、人後に落さざるべきを信ず。然れども、吾人は世人の如くに、徒らに、其形式を云々し、若くは、男子の不都合を爲すのみにては、其効の極めて少かるべきを知り、寧ろ其根本に溯りて、女子教育を盛にし、婦人の智力を進め、婦人の德義を研き、先づ、婦人の實力を增すを以て、婦人の位地を高め、兼て、社會の風儀を一新するが爲め、所謂急がば廻れの捷路なることを知る

といへる、此等の說は、頗る穩當を得たるものにして、婦人位地の進歩は、其智識道德の進歩に正比例す。

然れども福翁及び時事新報記者共に、また女子教育進歩せざるべからざるを唱へてやまざるものなり。現に、四月廿七日の紙上、社說に於て、『女子教育の方法』を講ず。さりながら、其女子教育の方針と稱するものも、亦これ、物質的なり、權利義務的なり、曰く

世間の父母たるものに於て、娘の幸福を祈らんには、先づ其教育に心掛けて、金錢の取扱、財產の關係等、凡て自から、自身の權利を守るに足るべき事柄は、一通を心得しめ、婚姻の時には、身分相應に財產を分與すること所要なり、……兎に角に、女子をして、自から一身の權利を守るの智識を得せしむると否とは生涯の幸不幸の分かるゝ所にして、家の貧富如何に拘らず、一般に心掛けざる可からず

とて、此方法によれば、女子教育は民法一部を以て終るべく、此趣旨によれば、結婚を以て、全然法の契約たらしめんとするものの如し。人生の幸福は、理に非ずして、情に在ることを忘れたるが如し。女子の一生、豈に名譽と權利とを重んずることをのみ知るが爲に、安息慰樂を得べけんや。福翁一派、よく女學論をなして、而して、女子の情性の眞相を考察せざるに似たり、否乎。

此故に吾人は福翁等の女學論を以て、實際、女子社會の進歩に有力なるべきものと信ずる能はず、故にまた、千代田日報が、五月三日の紙上、『婦人問題』にて

世の婦人論者が、女權の擴張を云々すと雖も、既に擴張と云ふ必ず、現在するものなかる可らず。已に現在するものなけんか、何を根本として、擴張せんや。吾人を以て之を見るときは、今日の日本婦人には殆ど人權すら、其有無を確むる能はざるなり

との說の是を認めず。また四月十七日の函館每日新聞が、

婦人の地位を高むるは、單に教育のみを以て、企圖し得べきに非ず、教育も元より欠くべからざるの要素なりと雖も、第一には夫たる男子の心掛を改め、第二は家庭の仕組を更ふるを以て專一とす。……婦人を墮落せしめたる大根源、即ち男子の輕蔑心を去り、婦人を箝制する大防害、即ち家務の畜界を行はずんば、一切の改良論到底謂ふべくして行ふべからざるなり。

と、時事新報に附和するは、これこそ謂ふべくして行ふべからざるの說なるぞかし。

さりながら、また京華日報(四月廿八日)が、『今日の婦人論の害毒』を論じて、

日本今日の有樣に於て、女子に權利を與ふるは、單に無益なるのみならず、又有害なるを認むるものなり。何となれば、日本今日の女子の實力を見よ、學問に於て、美術に於て、女子は決して男子の程度にあることなし、換言せば、女子は男子と同等なる實力なきものなり。

といひまた女子の德操、男子に劣る、然らば女子をして大に智育、德育を受けしむべしといふかと見れば即ち

如此き程度の女子をして、或權利を得せしめて、男子の事業に立ち交り、或は矯風會或は帝國婦人協會等を組織せしめ、或は和歌の會、或は文學會等に出入せしむる如きは、社會の風儀上、却て害ありて其益を爲さゞるものなり。

とて、女子押込論をなし、それかと見れば、

女子は家庭の女王となり、ナポレオンを養育し、ワシントンを教養するの功名の觀構あり、又何ぞ、社會の群に立交りて、雜兵的の事をなすを要せんや。といひ、今の女權論者は、最も社會の風儀秩序を紊亂せるの緒をなすものとなすといひ、また婦女が、實力を養成して、其の權利を實にしたるの日に於て、吾人は所謂女權なるものを認めんとす、今日の急務は、女子の教育に在りて、女子の權利を云ふべき時に非ずといふ。さらば、此論者に向つて、如何に女子を教育すべきかといへば、日本主義論者の弊論の常として、即ち女子は天性男子と同等の教育を受くべきの實權を有せずといふ。故に、卑劣なる動機に基ける、此説の如きは、畢竟女學の敵のみ。

福翁等の議論は、眞理に富みたりと雖も、論鋒、中を失するが爲に、其眞理も、十分に世益をなし能はざるやの狀あり。信濃每日新聞の一記者が、

先生の如くに、古今の聖賢は法るに足らずといふ語氣ありては、いか程の妙論も、人をして納得せしむるに足らざるべし

といへるは、至極尤もの説なりといふべし。急激なりとても、もしこれ、預言的ならんか、深量ある者は、顧る之を重んずべきも、福翁等の説は、預言的なると能はず。彼等の女學論鼓吹に勉むるの勞は、多謝すべしと雖も、吾人は、世上女子の、漫に、其說に心醉せざらんことを希望せざる能はず。

●私立學校令

恐なる哉、文部省の方針や。國民教育といふ空想に迷ひ、果ては、内地雜居後に、外人をして、日本人の教育に關係せしめざらんとの志想より、私立學校令なるものを設けんとして、これにて、私立學校設立者は、一定の資格あるを要す、文部の詮衡を經ざるべからずといふ案あり。高等教育會議の、之れを決したるも、また恐の極なり。文部は、國民の教育を主る府にして、而して、これより發する處のものは、數世紀以前の思想に基く。この令、發布せられんとして、外國公使等の反對に遭ひとかや。されば成行は、如何なるかは知らず、到底は、國の恐を示すものなり。かゝる令あればとて、外人等もし學校を起さんとすれば、如何樣にしてゞも設立するなり。折角、外人が、他國の日本人を教育してやらんといふを、土地を侵畧せらるゝかのやうに恐れるは教育に關する者の、智惠なさ加減驚くべし。日本にては、一番に智惠なきものが、文部といふものを組織したるにてはなきかと、外人に思はれても答なきものゝ如し、實に吾人は、蘇峯氏と共に、先づ所謂る教育家なるものを、世間並みに教育するより急なるはなし、といはん。日本の文部は、人民を頑愚に導くを方針とするものゝ如し。これ世界上の一大不思議なり。

恐論の府なる文部は、無用有害の長物なり、之を癈するに及かず、天下の笑となる高等教育會議の如きは、速にこれを解散すべし。今のやうにては所謂者溪派、大學派などの、教育家は、一人殘らず、跡を絶ちて可なり。これ却て日本文明の進步の爲めなり。

片々

●女子教育　とは先づ女子が人間としての教育に候。茶の湯、挿花、琴、和歌等の如きは、決して疎外す可きにあらざれども、此れは畢竟第二義に候。精神的の教育は、身體の健全の如く。技能の教育は衣服の如し。衣服も大切なれども、詮じ來れば、身體ありての事に候。緩急輕重の別在此焉。(國民新聞東京便り)

●三味線唄改良論　日本新聞は、化導の一端として、女學適用の三味線唄に改良すべきを論ぜり。

●三味線改良論　同新聞の三宅雪嶺氏は、洋樂は、中々に我邦に適用しがたきを以て、琴を改良し、また三味線は、製作を二樣にして、一を屋敷用とし、又た一を藝人用とすべし。藝人用のは、今の儘にて、屋敷用のものは、幾許か琵琶の形を混じ、ヴァイオリンの類を參考し、胴を今少しく隨圓にし、棹及び海老尾を雅に作るべし、又た革の張り方を更めて、將々雅音を帶ばしむべしといふ。

●大阪の女掛取　當地に來りて先づ目に觸るゝは、婦人が晦日の掛取に廻はる事に候。就中、美服して腕車に乘りたるもの有之、これは茶屋の女將なりとか申候(國民新聞大阪管見)

●家系連綿と醜惡　報知新聞の田川生曰く、本邦人は、家系の長久を念ふて、蓄妾の如き不德此中に行はる。夫れ醜惡を侵さば、家系の長久に、何の誇る所耶。何人も其分別に惑はざるべき筈なり、願はくは、我邦人が長久の家系よりも、寧

る罪惡なき一生を以て誇りとなすに至らんことなと。

●醜妓退治の一策　として（一）婦人の學校を盛んにすると（二）婦人に讀まるべき文學の進歩と傳播とを勉むべきと。（三）成るべく婦人をして公會に出席せしむると。（信濃每日新聞）

●妾を會長とす　某縣の婦人協會にて、例によりて、知事某の妻を會長に推選したるに、思いきや、其妻と思ひしは、實は妾なりしとかに、物議を起したりと時事新報傳ふ。

●女兒就學增加方法　過般全國聯合教育會にて、文部省の諮問案につき、女兒就學增加方法につき答申したるもの左の如し。

（第二諮問案）　女兒の就學を增加するの方法如何

本案は左の方法に依るを可とす

第一、就學規則を勵行すること

（理由）　女兒不就學の第一の原因は父兄たる者が男兒に比して女兒の教育を重んぜざる謬見に在り故に就學規則を勵行すると共に此の謬見を打破する方法をも取らざるべからず

女兒不就學第二の原因は父兄が業務の補助として其女子をして子守をなさしむるに在り故に就學規則を勵行するに方りては之が障害を除くべき方法をも講ぜざるべからず其方法如何と云はゞ各市町に托兒所若くは子守學校を設くべき制を定め學齡女兒をして學校課業時間中小兒を玆に委托して就學せしめ又は小兒を子守しながら就學し得べき道を開くこと尤も緊要なりとす

兒童不就學の第三原因は（獨女兒のみにあらず）就學せしめざる父兄に制裁を加へざるに在り故に就學規則を勵行するに方りては科料罰金等の制をも設けざるべからず

第二、學校の設備を完からしむること

（理由）　兒童をして十分就學（獨り女兒のみにあらず）せしむるには之を收容せしむべき場所を建設せしめざるべからず故に各町村をして學齡兒童を就學せしむるに足る丈けの校舍を設置せしむるを要す

第三、女子の教員を供給すること

（理由）　女教員多ければ女兒の就學多きは事實の示す所なり故に女兒の就學を增加せんとせば勢女教員を供給するの必要あり

第四、女兒に適切なる材料を撰擇して教科中に加ふるを要す

（理由）　女兒の就學を督勵せんとするに方りては父兄をして直接に間接に教育の實用に適するを知らしめざるべからず然るに今の教科目の內容は多くは男兒を標準とするものなるが故に父兄をして不就學の口實を作らしむるのみならず事實に於ても教育の理法に背く者なしとせずされば各教科目の材料を撰擇して女兒に適切ならしむること最緊要なりとす

●福翁女學論頌讚文　福翁が一たび女大學評論を出してより、頌讚文、四方より時事新報に集り（？）、其中の一例を擧ぐれば左の如し。

時事新報社御中　　門司　牛歩生

拜啓貴社益御繁榮奉大賀候然ば貴社が我國女子の爲に救世主となつて多年一日一夫一婦の大義を唱道せられ不義不倫の男子を容赦なく筆誅せられし結果漸く今日に顯はれ近來心ある人々の靱々として同情を寄せ靡然輿論を喚起せしは近來の一大快事に有之從來日隂者たりし我國女子は爲に晴天白日を睹るの愉快に遭遇するも不遠事と確信仕候さては我大日本帝國の爲に此上なき悅びに御座候足未だ甞て花柳の街を踏まず況して蓄妾の不義を犯せし事なき清淨潔白なる小生は我國未曾有のこの顯象を謳歌するの資格あるものと信じ敢て玆に拙文を呈して記者の高德を頌し併せて女性諸子の幸福を賀し候匆々謹言

○女學雜誌第四百八十五號　社說講義家庭雜錄時事等の諸欄總て玲瓏の文字に充たされ着想趣向淸淨にして一點厭ふべきの塵氣なし吾人は本誌が基督教の理想を傳播する者なるが爲めに其美を沒する能はず而して日本の女子社會に貢献する所も亦た尠少にあらざるべし（九州日々新聞）

○女學雜誌　巖本善治氏の編輯主任にて婦人雜誌としては有數の好雜誌なり（岐阜朝報）

○女學雜誌第四百八十五號　本號の重なるは笑ふべき內地雜居準備下婢養成所成立の好時機及び謙遜の社會に及ぼす現象等熱誠もて女道扶植を圖る志多さすべし（下野日々新聞）

◉諸新聞の女學論　（本誌〆切まで）

◎女大學評論（自第七回至第十回）福澤諭吉	時事新報	自四月廿日 至四月卅日
◎口を外國に藉るべからず	同	四月十九日
◎男兒と女兒	同	四月十九日
◎生前に恩ひを運らす可し	同	四月廿一日
◎男女の學說	同	連載
◎蓄妾家の弱點	同	廿二日
◎世間の親心	同	ゝ
◎原因は上流の男子に在り	同	廿三日
◎女大學の流毒	同	廿四日
◎男子征伐	同	廿五日
◎放蕩男子反省すべし	同	廿六日
◎女子教育の方法同	同	廿七日
◎殺人の例	同	廿七日
◎萬國婦人大會	同	廿八日

◎洋學書生警むべし　同　廿九日
◎刻薄男子（確報生）　同　卅日
◎醜行官吏の排斥　同　五月二日
◎無教育は男子に在り　同　五月三日
◎女子教育　人民四月廿七、八日
◎夫人の素顏○中島湘煙女史　報知新聞連載
◎福澤翁に寄す　同　四月廿三日
◎家系長久の念　同　三十一日
◎化導の一端（女兒適用の三味線唄）　日本　同二十六日
◎令孃鑑（織田常子○津輕理喜子○朝吹磊子○六郷芳子○津輕英子）　千代田日報連載
◎華族の家庭　同　四月廿三日
◎婦人問題　同　五月三日
◎下田歌子の事業　毎日新聞四月廿八日
◎伏見女學校　中央新聞連載
◎「日本」の大文字（國風子）　京華日報四月廿七日
◎今日の婦人論の害毒　同　同廿八日
◎藝妓退治の第一策（愛山生）　信濃毎日新聞四月十六日
◎近時の夫婦論（愛山生）　同　同卅日
◎昨今嚣しき婦人問題　函館毎日新聞四月十七日
◎西村翁の女子道德に關する講話　扶桑新聞四月廿八日
◎高等女學校に於ける西村氏の講話　若越新聞四月卅日

時報

◉學事

●築地立教女學校開校式　同校にては今回講堂新築落成せしにつき四月廿三日午後二時内外の紳士貴婦人數百名を招請して新築開校式を擧げたり。先つ幼年生の君か御代の唱歌、校長清水氏の挨拶終りて生徒總代の演說來賓和田垣謙三氏の男女兩性に付ての演說、平安女學院長田村初太郎氏の祝詞聖公會監督牧師の演說あり一同に茶菓を供して式を畢へたりさ。

●神奈川縣高等女學校　豫て神奈川縣教育會に於て協議中なりし同縣高等女學校設立の建議書は四月下旬に其筋へ呈出したる筈なりさ

●朝鮮婦人二名の養蠶科入校　韓國婦人二名は、佐賀農學校養蠶所新入學の爲四月下旬來朝せり。

●香蘭女學校第六回卒業式　四月廿七日擧行。

◉會合

●萬國婦人會　來る六月二十七日より一週間英國ロンドンにて開かるべき萬國婦人委員會は、去明治二十一年米國女子參政論者協會が一萬三千弗の巨費を擲ちて、同國ワシントンに招集せる萬國婦人協議會に端を發し、其時直に組織を立て、英國のフォーセット夫人を以て會長とし、五年に一度の大會を催すことを議決し、第一回の大會は去廿六年シカゴ博覽會の節之を開き、スコットランドのアバーヂン伯爵夫人を會長に推し、米國インデヤナポリス府メイ　ライト　シウヲール夫人を副會長に、フヰンランドのアレキサンドラ　グライベンベルグ　ヘルシン　グフオア男爵夫人を會計に選びしが、役員は何れも五年交代にて來る六月の會には副會長シウヲール夫人が會長に選ばるべき樣子ありさいふ。此會の目的は世界各國の婦人協會をして互に聲息氣脈を通ぜしむること、社會及び家庭の幸福を增進する方法につき相談の爲め世界各國の婦人一堂に集合するの道を開くことに在り。六月の大會に於て討議さるべき問題の重要なるものは國際間仲裁の方法婦人參政の可否なり目下此會に委員を出席せしむるは英、佛、獨、瑞典、伊太利、米國　フヰンランド、和蘭の各婦人委員會にして、何れもアバーヂン伯爵夫人の會長中に組織を遂げしものなりさ。開會中本會の事務所はウエスト　ミンスター　タウン　ホール　に置くよし　（時事新報）

●大日本婦人教育會慈善音樂會　同會にては、附屬女子學校維持費に充てんか爲に、四月廿九日神田錦輝館に於て慈善音樂會を開きたり。

●岡山孤兒院義捐音樂幻燈會　五月五日夜岡山孤兒院々長石井十次の卒ゐ來れる同院孤兒の樂隊は、義捐金募集の爲有志婦人の贊助を得て、神田基督教青年會館にて、音樂幻燈會を開く。

◉人事

●上杉子爵北堂の德行　舊羽前米澤新田藩主子爵上杉勝憲氏の養母喜武子（萬延元年二月生）は今回賞勳局より左の褒狀を授與せられぬ

子爵上杉勝憲養母　喜　武

資性貞順皈嫁以來病夫に事へ能く婦道を竭くし疾患沈滯荏苒癒へず衆醫概れ治術なきを告ぐるや居を閑靜の地に移し誠悃輔養日常病室を開閉して寒溫其の度を均ふし或は徹宵身躰を撫摩して病痺其の望みに飽かしめ排泄物の處分も亦未た曾て他人の手を借らず時に轉地遊浴に從ふとあれば起臥行止須臾も其の左右を離れず專心獨力看護を盡すと二十年一日の如し夫沒するの後髮を薙り室を守り姑の病に侍する等德行卓絕洵に奇特とす

●美談一束　小供の教育の爲め禁酒禁煙　千葉縣千葉郡津田沼村久々田の三橋光藏（國民新聞四月二十日）○慈悲深き婦人　芝區南佐久間町二丁目十二番地鈴木阿芳（四十五）（万朝報八月廿一日）○賢女豐嶽　牛込區原町三丁目四十七番地士族亡四川芳男の次男豐嶽（十五）（千代田日報四月三十日以後連載）

海舟餘波　批評第二回

◉海舟餘波を讀で巖本善治君に謝す　龜谷天尊

昔者、范希文、嚴子陵を歌って曰く、雲山蒼々たり、江水泱々たり、先生の風、山高く水長し、と蓋し范子は嚴先生が節を以て光武に屈せず、相尚くるに道義を以てし、聖人の清を得て、軒冕を泥塗にしたるの德を嘆美したる也、海舟勝先生の如き其半生の間に於て施設したるの功業は、彼れ嚴子陵が僅かに光武帝の諫議に拜せむとするを受けずして、超然其事を高尚にし、遂に富春山に耕釣したるに比すべくもあらざれども、其心事の高明にして淸大而かも、其風を聞かば貪夫をも廉に、懦夫をも立たしむるものありて、名教に大功あるに至ては兩者酷だ肖たるを知る、世海舟先生を評隲する者極めて多く、先生の片言隻語皆世人の視聽を聳動せしむるを以て幾多の文士が此偉人を捕捉し來りて種々に研究せるも未だ其肯綮を得たるものを見ず畏友巖本善治君は謹厚の士なり、其天分も亦固より高し、此謹厚の人謹嚴の筆を以て、明治二十年以來毎週一二回親炙詳悉したる海舟先生を傳す其先生の性行言動を實寫せるは固より疑ふべからず、君頃日先生を傳せる「海舟餘波」一本を贈らる、薦誦數回　先生の性行言動、躍然として紙上に顯れ　沈思默想仔細に讀過するに髣髴として故先生に親接して、其音容に咫尺するが如し、然るに君自ら曰く、斯書、海舟の傳にあらず、亦論にあらず、余罷豈に先生を傳ふるを得んや、況や能く之を論ずることをや：：茲に「餘波」と題す、先生化動の跡に就て仔細に研究し、同人と共に苦學を重ねんとする　微旨なりと、又曰く夫れ人世は海の如し、巨舟之を渡る、たとひ能く痕跡を消すと雖も、豈亦餘波の白鷗を浮沈せしむる者なからんやと、何んぞ其辭の謙讓にして其文の神來なるや、余は此傳を讀みて、能くも海舟先生の眞相を解剖して天地の間更に一物なきが如く、淨躶々、赤灑々と爲して遺憾なからしめしを謝すると共に益々君を推重するの念を高からしめし也

貴二眞人之休德一兮。美二往世之登仙一。
與レ化去而不レ見兮。聲名著而日延。

（東京朝日新聞。五月八日）

◉海舟餘波を讀む　大恩堂

海舟翁は一代の偉人なりき、偉人なる同時に一代の諷刺家にして、亦一代の大野狐精なりき、「海舟餘波」は之を說明するに足る。編者巖本善治君は、此書に依て翁を評する莫れと云ふ。然れども君が筆記は、一語一句をも苟もせざるが上に、開卷第一、翁の肖像あり、肖像より八九頁隔だてゝ「氷川のおさづれ」あり「氷川のおさづれ」は翁の起居を詳記したるもの、是を觀彼を讀み、次ぎに翁の談話に及べば翁の面目を露出し來る。翁の顏は、少しく猿に似、從て少しくボルテールに類す、其の言ふ所の、多少ボルテール的なるも妙と云ふべし、若し東西地を替へば、翁は確かにボルテールたるを得べかりしならん、但しボの翁たり得べきか否は疑はし。

翁は何人にも許さず、南洲々々と云ふも、必ずしも絶躰的に感望するに非ず、故に「ナァニアレ丈けの不平黨を散らすのは譯はない」と云ひ又島津順聖、阪本、廣澤、岩崎等を賞賛するも、皆な彼等を弟子視して、先生が弟子を譽める類のみ。若し翁の言を眞實なりとせば、德川末路以後の日本は、萬般の事悉く翁に賴りて其處を得たりとせざる可らず。其天狗も亦大なるかな。唯夫れ翁は西洋を恐れしこと虎の如し、此點に就ては、今の大臣鉅卿と異なる所なし翁曰く「規模は大くて遠大だチャーンとして立て居ゝ」と此類尙ほ多し。

翁の見地は、「悉く自然より來る。地位は逆境なるも、行爲は逆境より出さず、却て自然の趨勢を認めて之に就く、故に順境に立つと擇ぶなし　長洲の談判、江戸城引渡の大事より、耶蘇教の始末天璋院の處置等悉く然らざるなく、これ翁の功を爲したる所以なるべく、又翁の智なる所以なるべし。

若し夫れ這の大野狐精を細評せんと欲せば、數日の紙面を埋むるも尙ほ足らず、今只小棒一本を用ふるのみ。　（東京朝日新聞、四月廿七日）

◉東京日々新聞　（四月廿九日）

女學雜誌社長巖本善治氏が故海舟翁の談片を編して一小冊子となせるものたり編者は曰く「先づ試に先生在世中に筆受して存ずる所の一部を公にし以て他の同志の感應を惹く夫れ人世は海の如し巨舟之を渡るたとひ能く痕跡を消すと雖ども豈亦餘波の白鷗を浮沈せしむる者なからんや」と題して餘波と稱するの意蓋し此處に存す翁が居常經歷既に凡に超越す其性冷なるが如くにして冷ならず熱せるが如くにして熱せず明なるが如く暗なるが如く之れを望むに茫として海洋の如く赫として烈日の如し吾人をして測る可からず又近づく可からざるの感あらしむ唯此編收むる處の談編以て僅に翁　如何なる人物たるかを彷彿するに足るべく編者の意も亦之れを讀者の判斷に委し去るが如し處ふに翁が國家の爲めに經營せる事業は少からざる可く國家が之に依つて享けたる利益も大なるが如し然るに翁は自ら天海を以て任ずる處ありたるが如く強て功名を貪るの念なし翁が偉なり大なるの所以は主として機を察するの敏なると未然を洞視するの明ありしとの二事これなり政局の變轉世運の推移紛々として規定する處無きが如くなるも實際に於ては整然として萬世不變の徑路ありて存ずるが如し翁は能く此徑路を知る故に迷はず翁の談片一一之を味ひ來らば吾人の學ぶ可きもの決して少々に非らざるを信ず。

◉獨立雜誌　（第二十九號）

幕末の遺臣、明治の奇士海舟の談話を著者巖本氏が筆記せるものなり。一讀翁のおも影一言一句の間に躍如たるものあり、若し仔細に讀行かば啻に此偉人の面目を知了し得るのみならず、明治三十年間の歷史をも學ぶを得べし。卷首には鮮明なる翁の肖像、著者の「先生を失ふの歎」と外に「破默建言」の一章を附す。翁が經世策を知るの好材料。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

（四八七）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY